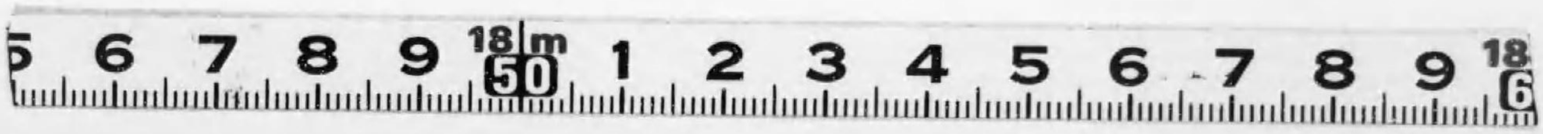
6 7 8 9 18 m 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 6

506
16

25. 2. 27.

506-16

懺悔

ゴオルキイ作
勝屋英造譯

大正
11. 2. 25
内交

懺悔

ゴオルキー作
勝屋英造譯

一

一つ自分の經歴を聞いて貰ひたい。それは左程長く時間もかゝらないし、またそれを聞いたからとて何の害毒もないのだ。

自分は恥辱の兒で、無籍もので、棄子だ。生んだ母親が何ものだつたかさへも知らぬ。クラスノグリンスクのソコールと云ふ村に居たロセヴの所有地に棄てられてゐたと云ふこと丈けは他人から聞いて知つて居る。自分の生母か誰か他の人かは知らない

382.

が、ロセヴ老夫人の葬られてあつた小さな龕堂の蹈段に置き去りにしたのを植木屋のダニイル・ヴィアロと云ふ男に見付けられた。ある朝未明、此のダニィルが、その庭園にやつて來て見ると、襤褸に包まつて居る嬰兒が龕堂の入口に腹這つて居た、その側に鼠色の猫が怖々と這ひ廻つて居た。

自分は滿三歳以上になるまで、ダニィルに育てられたが、彼には子供が多かつたから、その場合どうしても、自分で食を求めなければならなくなつた。で、自分は何にも食べるものを見つけなかつた時には、暫らくの間、大きな聲で叫んで、疲れ切つて空腹のまゝ寢ることも屢々であつた。

自分は四歳の時、堂守のヒラリオンと云ふ男――全く孤獨の生活をして居た非常に風變りの男――が自分を養子にした。彼は何にか激しい煩悶から自分を養子にした。身長が低く、顏が豚のやうに圓く肥つて髮が赤く、その聲は宛然女性のやうにやさしく、心もまた女のやうで誰にも親切であつた。彼は燒酎が大好きで、何時も思ふ存分

飲み浸つてゐた、彼は素面の時、兩眼を半ば閉ぢ、何にか世間を憚るやうに、少しも口をさかず、歩き廻つてゐた。が、然し彼が一杯機嫌の時には讃美歌や流行歌を歌ひ頭を上げて誰にでも微笑を洩したものだ。

彼には伴侶と云ふものがなく、全く孤獨で、貧しい生活をしてゐた。彼は有つてゐた土地をお寺に寄附して了つて、夏と冬は漁獵に出掛け、活計を立てるため、鳴禽を捕へることにしてゐたので、自分にもその仕事を手傳ふことを敎へた。彼は鳥が好きなので、鳥の方でも少しも彼を怖れるやうなことはなかつた。今でもあり〳〵と目に見るやうに記憶して居ることがある、――あの臆病な五十雀が彼の周圍を飛び廻はり、頭髮を縋らし、小さな狡猾な頭を動かして彼を熟々と凝視めてゐた。それからこの堂守が煖爐の側の椅子に腰を掛けて、頭や髯の周圍に麻の實を撒らして居ると、そこに鳶だの金翅雀だの、山雀などが飛びついて頭髮に群り、背に登り、耳を啄き、鼻に止つてゐる、彼は平氣で笑ひながら、眉を蹙めて此等の小鳥と親しげに語り合つて

居た。自分は彼がうらめしかつた。鳥は自分を怖れてゐた。

ヒラリオンは温順い性質の男であつた、凡ての動物はこれを能く知つて居た、然し自分は人間もさうとは言ひ兼ねる。かと云つて人間を責める譯でも何でもない、自分は人間が彼に撫育されてないことをよく知つてゐるから。

冬期になると、彼の生活は悲慘なものであつた。お錢がありさへすれば直に飮んで了ふから、薪炭も買ふことが出來ぬ。多くの小鳥が囀づたり、歌つたりしてゐても、地窖のやうに小さな室で却々寒かつた。彼は何時も小鳥に何かさゝやく癖があつた。彼は不思議な程柔しくさゝやき、大きな嘴のやうな鼻と赤い頭をしてゐるので、交隊そつくりであつた。

『よく聞け、マトヴ！　よく聞け！』マトヴとは自分が洗禮を受けたとき命けられた名であつた。

頭を兩手で抱いて後の方に凭りかゝつて、眼を閉ぢ、美妙な聲で哀悼の歌の一つを

歌ひ始めた。ヒラリオンの聲が彼等全體に聽かれるので、小鳥は囀ることを止めて耳を傾け、それからお互にかはりがはり囀り始めた。それで驚と金翅雀と鶺と椋鳥はむきになつて怒り出した。彼は歌つて居る間に、屢々兩眼から涙が流れ、餘り泣いて顏が土のやうになつた。そんなことを度々見たので、自分は柔しく彼に尋ねた。

『小父さん、何故、何時もそんな緣起でもない歌ばかし歌つてゐるんだね。』

彼は急に歌ふことを止めて、自分の方を眺め笑ひながら答へた。

『さう氣にするなよ、馬鹿な青二才奴、何故、死の歌を歌うかと云ふのか、それは美しいからだ。敎會のあらゆる儀式の中で、追善祭程美しいものは何にもないぢやないか。人間に對する善意はその歌の基調で、また人間に對する憐憫もそれだ。人間社會に憐憫の情は死人以外のものに對しては見ることの出來ないものだ。』

自分はその時彼の言ふことを餘程よく注意したが、充分に理解することが出來なかつた。吾人は後になつて成長して分別がつくやうにならないと、少年時代のことを理

解することが出來ないものだ。また自分は一度彼に、何故神は人間のために骨折りを惜み玉ふかと尋ねたことを記憶して居る。

『それは神の仕事ぢやない』と彼は自分に說明した。『自分で骨を折れ、そのために前に理解力と云ふものが與へられてある。神は死に對する恐怖の幾分を殺ぎ去る爲に存在してゐる、が、どうして生きるかについてはお前自らの仕事だ。』

自分は直ぐに此の語を忘れて了つて、それを記憶から喚び起したのは餘程後のことであつた。そのため大分無益な苦痛を受けた。

このヒラリオンと云ふ男は餘程變り物であつた。大抵のものが漁獵に行くと、魚を驚かしてはと心配して大きい聲で話もしないが、この男は歌つたり、自分に聖徒の物語や、神のことに就て話して聞かした、そのため魚は却つて逃げないで、魚の方が氣でも狂れたかのやうに竿にかゝるのであつた。だが鳥狩りに行つた時は反對に非常に靜かにする習慣であつた。彼は始終口笛を吹いて小鳥を呼び集め、彼等と物語つた。然

しそれは小鳥を捕るに少しも邪魔にはならなかつた。小鳥は係蹄か羅網をもつて追ひたてられるやうに、彼の周圍に群り集つた。而して蜜蜂の場合に、新しい群を巢に集めるとか、或は何かそんなやうなことがあつた時、古い養蜂家はその仕事に從事して居る間、何時も禱ることにしてゐた。その時でも、彼等は何時も成功しなかつた。その時彼等は堂守の助力を求めた。そこで彼は蜜蜂を逐出し、それを殺した——その間、間斷なしに激しく罵り呪つてゐた。而して萬事彼が罠で鳥を捕ると同じやうな工合に行つた。

彼は蜜蜂が嫌ひであつた、それは彼の娘が蜂に刺されて盲目になつたからだ。まだ三歲になる小さな娘は蜂の巢に取り上つた。蜂がその眼を刺した爲め、その一眼を病み、見えなくなつた。他の一眼も同じく見えなくなり、最後に子供は頭腦が惡くなつて死んだ。その結果母親も氣が狂つて死んで了つた。

ヒラリオンは他の人には萬事につけ冷酷であつたが、自分には何時も母親のやうに

親切であつた。その村で自分を愛して呉れる人は誰もなかつた、その土地の人々は至極悲慘な生活をしてゐた、自分は彼等には全くの縁故のないもので、彼等の手から突然に麵麭を奪ひ取つて食べると云つたやうな厄介者であつた。

ヒラリオンはまた教會の仕事を自分に教へて手傳はした。自分は彼が云ふまゝに手傳つて一所に讃美歌を歌つたり、香爐に香を入れたり、その他必要な仕事をした。自分はまた教會の番人ヴラスイを助けて會堂内の整理をした、それに自分は少からず興味をもつてゐた。會堂は石造で室内が温められて、心地よく温かであつたから、冬期は至極愉快な仕事であつた。

自分は朝の勤行よりか夕の勤行が好きであつた。夕になつて人間が浮世の塵埃を拂ひ、あらゆる勞苦を忘れると、敬虔の念が湧き出で、心緒が靜まり、精神が溶けて、胸奥に潜んで居る心情が蠟燭の光のやうに輝いて來る。その時各自の顔容や形狀は異つてゐても、彼等の體は別物ではなく、一體となつて居る。

ヒラリオンは禮拜が好きで、何時も眼を閉ぢ、赤い頭を後方にそらし、結喉を突き出すやうにして、大膽に讃美歌を歌つた。彼は餘りに熱中して調子外れに歌うので、牧師は何時も敎壇から彼に合圖を以て注意したものだ。

『どうしてそんなに早く歌ひますか。』

彼は何時も美しい熱情のこもつた聲で歌つた。牧師は彼を好かなかつたが、彼もまた牧師を好かなかつた。で、彼は屢々自分に云つた。

『いやな坊主だ、彼奴は眞面目な坊主ぢやない。習慣と强迫の鞭で打つ大皷のやうなものだ。若し俺が坊主であつたら、熱誠をこめた禮拜をやつて、信者は云ふまでもなく、壁間に懸つてゐる聖徒の像までも泣かして見せるがな。』

それは全く彼の云ふ通りであつた。成程牧師には稟々しい所がなかつた。火藥で燒け焦げたやうな眞黒い顔容に、反りかへつた鼻がくつついてゐる、口は馬鹿に大きくて齒がない。むしや〳〵した鬚、薄い頭髮、前額が禿げ上がり、腕が馬鹿に長かつた。

しやがれ聲で、重い荷物でも曳いてゐるかのやうに唸つてゐた。彼は大の慾張りで、何時も不機嫌であつた。彼は家族が多く、村も貧乏で、耕地も瘠せ、少しも金儲のない處であつた。

夏になつて蚊が雲霞のやうに攻めて來る時でも、ヒラリオンと自分は森林の中で晝夜坐つて鳥を捕るか河川に行つて漁をするかしたものだ。敎會に何か仕事が出來て、彼が何處に居るか分らない時には、村中の子供が總がゝりで探がす、子供は兎のやうに山となく川となく走りながら叫んだ。『堂守！　ヒラリオン！　ヒ、ヒ、ヒラリオン！　直ぐに歸つてお呉れ、お前さんの用が出來た！』

やつとのことで、遂に彼を探し出す、牧師は彼を罵り、不平を列べて脅かしつけるが、村の百姓どもは皆笑つて居る。

二

ヒラリオンにはサベルコ・マイガスと云ふ友人があつた。有名な盜賊で、酒飲みであつた。彼は犯罪のため屢く擊たれたり、獄舍に縛がれたこともあつた。然し非常に面白い男で、俗謠を歌つたり、考へても恐ろしいやうな方法で話したりして居た。

自分は屢々彼の歌ふのを聞いた、今でも歷々と彼が自分の前に起つて居るのを見ることがある。痩せた元氣のいゝ、髯はやつと三四本ばかり生えて、ぼろ〳〵の着物を着た小さな楔形の顏をした男であつた。彼の額は廣く、陽氣な意地惡るさうな眼は曇つた二つの星のやうに閃いて居た。

彼は屢々燒酎の壜を持つて來た、でない時にはヒラリオンを買ひにやつた。それから二人は何時も食卓に差向に坐つた、そしてサベルコは云つた。

『堂守！　あの懺悔の頌を歌つてお呉れ。』

兩人が一口ぐいと呑んで、それからヒラリオンが——初めは幾らかまごついてゐるが——歌ひ出し、サベルコは其處に根が生えたやうに坐り、名ばかりの髯が顏へて、

兩眼から涙が溢れて居る。彼は眼を瞬き、手で額を撫で、笑ひながら、頬から流れる涙を指で拭きとつた。

その時彼は印度ゴムの風船玉のやうに飛び上つて叫んだ。

『うめいぞ、ヒラリオン！　俺は眞にそんな立派な頌を作つて讃美される神が怨めしいや、人間は何もなすことは出來ぬか、ヒラリオン！　人間は性質が善良で氣品が高ければ、幾分か偉い、そんな人間は神の前に起つて「神さま！　あなたは私に何も呉れなさらぬ、私はあなたに全心全靈を捧げて居るのに」と云ふことを躊躇せぬ。』

『神さまを呪ふな！』とヒラリオンが云ふと、サベコルが叫んだ。

『俺か、俺はそんなことは考へてゐねえ。そんなことは俺の頭腦に這入つてゐねえ。何時俺が神を呪つた。斷じてそんなことはねえ、俺は唯神のためにのみ喜んで居る、神以外のものの爲めではねえ！。さあ、俺が何にか一つお前に歌つて聞かしてやらうな。』

彼は起ち上り、腕を伸ばし歌ひ始めた。彼の歌は餘程ゆつくりして隨分變調なものであつた。彼の眼は廣く開かれ、怪しげな火のやうに輝き、伸ばした手の皺くちやな指は何かを探してゐるやうに、絶えず動いて居た。ヒラリオンは壁に凭りかゝつて起ち、手を脚掛に置き、口を開け、驚いて眺めて居た。煖爐の側に横になつてゐた自分は、何だか少し悲しいやうな氣分になつた。サベルコの顏容は眞黒で、只小さな齒のみが白く光つて、焦げた舌は蛇の舌のやうに動いて居る。大きな玉のやうな汗が額に垂つてゐる、彼の聲は牧場を流るる小川の水が張り溢れて、水沫を飛ばすやうに盡きない。彼の歌が終つて徐々と席に立ち歸り、手の掌で顏面を撫でた、そこで二人は飲んで長い間默つて坐つてゐたが、サベルコが叫んだ。

『さあ、ヒラリオン！「大洋の波濤のやうに」歌へ！』

こんな工合に、彼等二人はぐでん〳〵になるまで飲んで終夜興がつて居る。マイガスは牧師や地主や國王に關する種々の鯰背な物語を始めた。堂守はそれを聞いて呵々

と笑つた、自分も笑つた。サベルコはそれからそれと話を續け、そしてその話し方がおどけ切つて居るので、聽くものは笑はずに居られない。

彼は休み日に飮食店ではもつとよく歌つた。その時彼は聽衆の前に進み出て、固く眼を閉ぢ、額に皺をよせて歌つた。その歌を聞いてゐると、歌が土地から湧き出で、土地が彼に歌はし、彼の聲に力を貸すやうに思はれる。百姓共は彼の周圍に起つたり坐つたりしてゐる。首を垂れて鬱を噛つてゐるものもあれば、眼を光らしてサベルコを凝視めてゐるものもあつた。婦女どもの中には彼の歌を聞いて泣くものもあつた。

彼の歌が終ると、彼等は何時も叫んだものだ。

『今一つ歌つてお呉れ！　今一つ聞かしておくれ！』

そこで彼等はマイガスに燒酎を馳走した。

マイガスが話した中に、かう云ふ物語がある——昔、彼がある村落で、何かを盜み、百姓どもが彼を現場で捕へて云つた。

『かうなつてはお前も進退谷つたらう！　致し方がない、俺共はお前を縛りつけやうと思つてる！』

彼の返答はかうだ、

『百姓さん達！　そんな向ふ見ずの馬鹿は演るものでねえよ、お前さん達は俺が盜んだものを取り返へしたんだらう、それで、お前さん達に何の損害があるんだ、お前達は少々づつ圓い光るものを儲ける、が、何處を探したつて、俺のやうな人間を見附けることは出來ねえよ、俺がゐなくなつたらどうだ、何處にお前さん達の心を喜ばすものが居る？』

『それは成程それに違ひない。』と彼等は云つた。『然しお前の歌はお前の生命を救ふことは出來ぬ！』

そこで、彼等はサベルコを森林に連れて行つたが、彼は途中間斷なく歌つてゐた、初め百姓達は彼を急き立てたが後には步調を弛め、到頭森に着いた。彼等は繩を用意

したが、サベルコが最後の歌を終るまで待つて居た、その時一人が云つた。

『彼は今一つ歌つていゝ、然しそれがもう最後だ！』

彼は其を歌つてから、また一つ歌つた。その間に太陽が昇つて百姓共は周圍を眺めた——暁の美しい光が東の方から破れるやうに輝いて來た。マイガスは彼等の中央に笑ひながら、少しも恐怖の念なく死を待つて起つてゐた。

これには百姓達も當惑したと見えて叫んだ。

『鬼神に彼を任かして、俺等は彼を恕してやらうぢやないか、若し俺等が彼を縊り殺したら、恐ろしい罪を受け、其上熱湯の苦痛を受けるかも知れねえ！』

そこで彼等はサベルコを恕すことに定めた。

『お前の墓のために俺等は一歩を讓らねばならぬが、お前の盜賊根性については何とかして懲らさなければならぬ。』

彼等は柔しくサベルコを撲つて、彼を連れて村に歸つた。

多分こんなことは眞の虚構談だらうが、それがまた百姓達の氣に入つて、またサベルコに對する信用を重くした。つまり、これが只一篇の物語であつても、人間は全く惡徒ではない。でなければ、人間はこんな美しい物語を創ることは出來なかつた。

サベルコとヒラリオンは一緒に歌ふばかりでなく、何時もいろ〳〵な問題を議論したものだ。二人の物語はよく惡魔の話になつた、二人とも惡魔を信じては居なかつた。自分はこの場合に堂守が云つたことを記憶して居る。

『惡魔と云ふ奴は、お前の心の奥に潜んで居るのだ、つまり、自己心中の暗黒、罪惡なんだ！』

『お前さんは、畢竟、俺が愚鈍だからさう云ふんだらう！』とサベルコが云つた。

『きつとさうだ！　それに違ひねえ！』

『さうでなければならぬと思つてる！』マイガスが笑ひながら云つた。『若し惡魔が實際居るものとすれば、彼はきつと餘程以前に俺の頸を摑み捕つてる筈だ。』

ヒラリオンは少しも惡魔の存在を信じて居なかつた。自分は一度彼が非國敎の百姓達と惡魔について論議したことを記憶して居る、彼は百姓達に向つて恁う云つた。

『それには少しも惡魔らしい處がない、只獸的だ、美とか惡とかは人間の中にある、若しお前が善と思へば善になり、惡と思へば惡だ、惡はお前から出て、お前に歸つて來る。神はお前を善にも惡にも惹かぬ、お前が神を離れて創つたものだ、お前がなす所のものは善でも惡でも、お前の自由意志でやつてゐるんだ。然しお前の惡魔は貧窮で無智だ。善は實に神から來るのだから人間らしいものだ。お前の中にある惡は惡魔とは何の關係もない、それは只獸的な所から起るのだ。』

百姓達は彼に向つて叫んだ。

『この赤毛の異端者奴！』

然しサベルコは何時も此說を固く執つて動かなかつた。

『惡魔はまたその點で角や山羊の足で描かれて居る。それは人間の中に獸的の要素があるからだ。』

ヒラリオンは救主基督のことを話すと、なか〳〵何うして巧いものであつた。自分は光榮ある神の一人子基督の殘酷な運命を瞑想するごとに泣かざるを得なかつた。寺院で學者達との議論から、ゴルゴタに於ける十字架に至る一代に、人間に對する不言の愛のあまり、凡てのものに對して親切な微笑と、優しい慰安の言葉に充てる清淨無垢な愛らしい子供——神の美によつて皆のものを眩目さした子供——のやうに自分の前に現はれる神を見た。

『基督は寺院で子供のやうに學者達と話した』ヒラリオンが云つた『それで學者達にも飾氣のない智識の中に何處か崇高い所があるやうに見えた。何時もそれをよく考へよ、モティカ！　お前の全生涯を通じて、心の中にある無邪氣な要素を保存するやうにしなければならぬ、眞理はその中にあるのだから。』

『何時、基督は此世に再現するでせう？』

『直ぐだ』と彼は云つた『基督は直に來なければならぬ、人間が今一度彼を求めてゐると云ふことだから。』

自分が、今ヒラリオンの云つたことを想ひ起すと、彼は神を最も美はしきものを創る偉大な教師のやうに考へ、人間を浮世の行路に迷ふ頼りなきものと觀、神がこの世で與へた莫大な財寶の不幸な相續者として、人間に同情してゐるやうに思はれる。

ヒラリオンとサベルコとは同じ信仰を有つて居た。

自分は今ある不思議な畫像が其村に現はれた場合のことを想ひ起すのである。ある秋のことであつた。未明にある婦人が水を汲みに井戸に行つた。突然井戸の底に何か輝いて居るものを認めたので、村人を呼び集めた。すると警察官や坊主までも其處に集り、ヒラリオンも走つて來た。一人が井戸の中に這入り込んで水の中から、聖母の繪像を取り上げた、直に其處で感謝會が執り行はれ、その井戸の上に會堂を建てることになつた。

坊主が叫んだ——

『皆さん此處に供養物をお持ちなさい！』

警察官がそれを催促し、自ら進んで三留の紙幣を取出した。百姓達も財布を開いた。婦女達も躍起になつて、リンネルや、種々な果實や、野菜穀物を持つて來た。村中大變な騒ぎとなつた。で、自分も更生祭と同じやうに愉快であつた。然し感謝會の間、自分はヒラリオンの顔が黒くなり、誰にも遭はず、サベルコが鼠のやうに群衆の中を通り抜け、苦笑して居るのに氣がついた。

自分も不思議な繪を見るため其の晩に出掛けた。眼に見えない動物が微に呼吸してゐるかのやうに、薄い煙のやうな薄藍色の霧氣が井戸の上に懸つて、光線と溫度を與へてゐた。

それを熟視した時、自分には悲喜の情が同時に起つた。

自分が家に歸つた時、怒氣を帶んだ調子で、ヒラリオンがかう云ふのを聞いた。

『そんな聖母があるものか。』

サベルコは笑ひながら懶氣に答へた。

『俺はそれを知つてる、摩西が基督の以前に存在しなかつたかのやうに。いやはや、何たる詐欺師達だらう！　奇蹟だつて！　へい、何たる馬鹿者達だらう？』

『警察官も僧侶もこの奸計のため監獄に打込まなければならぬ』ヒラリオンは極くやさしく言つた『利益のために人間の中にある神を殺すことを知らないかも知れぬ。』

この會話は自分の趣味に合はないやうな氣がしたので、自分は煖爐の側に横になつたまゝ尋ねた。

『小父さん達は何の話をしてゐるのかね。』

すると二人は默つて了つた。二人は會話を聞かれるのを憚るやうに、小さな聲で叫さだした、その時サベルコは堂守に叫んだ。

『お前は何うしたんか、一般の人間に不平を云ふのか、彼等を皆馬鹿と云ふのか、それでもお前はこの小さなモティカを馬鹿にすることを恥ぢない？、何故さうか。』

その時彼は飛び上つて自分に云つた。

『これを見よ、モティカ！　俺はここにマッチを持つて居る。俺は手でこれを擦つて見せよう、見えるか、洋燈を消せ、ヒラリオン！』

彼等は洋燈を消した。それから自分は眞暗黒の中でサベルコの兩手が、あの井戸から取上げた不思議な繪像のと同じやうな淺藍色の雲霧で輝いて居るのを見た。それは魔法で、いやな見物であつた。

サベルコは何か云つた。然し自分は煖爐の隅に這入つて、指で耳を塞ぎ一語も云はなかつた。

彼等二人は銘々に燒酎を採り、眞正の奇蹟と人類の信仰に反した詐僞の共謀とについて話し出した。自分はこの議論の間、眠つてゐた。

けれども二三日後になつて、村に一隊の僧侶と役員がやつて來てその繪像を沒收して了つた。警察監督はその役を免せられ、その地方の僧侶は法律處分を受けた。その時自分も詐欺の行爲であつたことを合點した、自分は凡てこれが婦人から布を奪り、百姓から金を搾るために演られたことを知つて心底からいやな氣持になつた。

自分がやつと六歳になつた頃に、ヒラリオンはスラヴ語の祈禱書を讀むことを敎へた、それから二年經つて冬期の學校が始つた時、彼は自分を學校に通はして呉れた。初めて自分は彼に少し疎まれだした。自分は學問が好きで熱心に書物を手にした。彼が自分に日課を復習さした時、何時もかう云つた。

『よくやつた、モティカ！』

一度彼は自分にかう云つた。

『モティカ！　お前の生れはいやしくはない、お前の父親は鈍物でなかつたに違ひない！』

自分は彼に云つた。

『では自分の父親は何ものでせうか。』

『誰も知らぬ。』

『百姓でせうか？』

『彼は人間であること丈けは確かだが、果して彼が何ものであつたかは誰一人知るものがない、然し彼の性質は別として、お前の顔容や筋肉から推測すると、どうしても百姓らしくない、どうしても武士のやうに思はれる。』

出放題に彼が話したこんな言葉は自分の記憶の中に根を下し、自分には好ましからぬものであつた。學校で朋輩達が自分を棄兒と云ふ時は直に後足を立て彼等に向いて叫んだ。

『貴樣達は百姓の子だが、自分の親は紳士だ！』

それから自分は剛情になつた——人間は侮辱に對しては何とかして自己を保護しな

ければならぬ。その當時他に自分を保護する道が見附らなかつた。そのため自分は學校朋輩に愛されなかつた。彼等は自分に種々な綽名を命けたが、自分も思ふ存分彼等を打擲してやつた。自分は剛情な子供で喧嘩にかけては却々勇悍であつた。餘程長い間、自分に對する不平が重つて、少年達の兩親が堂守の所にやつて來て云つた。

『あの亂暴小僧を縛りつけておくれ！』

だが、他の人は自分に對つて不平を云はなかつたが、耳を強く引いて、彼等は思ふさまゆすぶつた。ヒラリオンはその時に云つた。

『きつとお前は大將の子だ、でもそれは大したことでないぢやないか。人間は同じ方法で生れたのだから、名譽は各自皆一樣だ。』

然しこれはもう遲かつた。自分はその時に十二歳で、村の子供等の嘲笑を銳く感じた。ヒラリオンは自分を子供の仲間から引き取つて彼の傍を離さないやうにした。その冬期の間自分は林間を彷徨つて鳥を捕つたが、この技術には餘り進歩しなかつた。

十三歳の時に自分は學校を退いた、それからヒラリオンは自分と共に何をやらうかと迷つてゐた。折々二人は小船に乘つた。自分は櫓をこぎ、彼は艫に坐つた、そして自分は頭腦に浮ぶあらゆる運命を想像し、自分の將來行くべき道程を考へた。

自分はもう僧侶にならうと思つた。で、堂守が兵士か商人になれと云ふ提案には贊成しなかつた。

『では全體お前は何になりたいだね？』と彼は自分を見て笑つて言つた『よし、何にもさう心配することはない。何にかお前は地位を發見るだらう！、だゝ兵隊にならぬやうにしなければならぬ、でないとお前は人間を止すことになるから。』

八月のある日——聖母昇天祭の後間もなく——自分共兩人は鯰魚を漁るため、リユウブシヤの地方まで漕いで行つた。ヒラリオンは少し醉つて、それにまだ燒酎を携帶してゐた、彼は折々それを傾け、咳嗽をし、ありつ丈けの聲を張り上げて歌つた。

小舟は餘りしつかりしたものでなく、小さくでゆら〳〵した。ヒラリオンがその中

で突然に向き換つたので、遂に顚覆し、兩人は河中に墜ちた。小舟が顚覆したのはこれが始めではなかつた。自分が首を上げて見ると、ヒラリオンは自分の方に向いて頭を振り、

『お前、堤まで泳いで行け、俺は一人で船を直すから。』

と云ひながら泳ぎ寄つて來る所であつた。堤の近くに寄ると水流が弱くなり、自分は靜かに泳いでゐたが、突然何にか〳〵足を引くやうな氣がした。自分は冷かな場所に來たやうに思つた。自分がふり廻つて見ると、龍骨を上に向けて浮んで居る小舟ばかりで、ヒラリオンの影が何處にも見えなかつた。丁度石で頭を打たれたやうに恐怖の苦痛が自分の心に起り、痙攣を起して沈んで了つた。

野原にゐた土地管理者エゴア・テイトヴが走つて來た。彼は顚覆した小舟と水中に失望してゐたヒラリオンとを見た、自分が沈んだ時テイトヴはもう堤に衣服を脫ぎ捨てゝゐた。彼は自分を救つて呉れたが、ヒラリオンはその夜まで見つからなかつた。

三

フレッドは愛すべき親切な男であつた。突然に自分は氣が鬱ぎ、惡寒を催して來た。彼等が堂守を葬つた時、自分は病氣で臥て居たので、最も愛してゐた彼に最終の敬意を拂ふことが出來なかつた。自分はやつと足が起つやうになつたので、初て墓參をした。墓前に跪いた時、自分の悲嘆は劇しくなつて涙も流れ出ない程であつた。彼の聲が心に浮び、歷々と聞くやうな氣持がした。親切を以て自分の頭上に手を置いた唯一の人は、今ははや此世のものではなかつた。それで何もかも變つて來たので、自分は瞑目して坐つてゐた。

突然に、誰か來て、自分の手を取つて起した、見るとテイトヴであつた。

『お前は此處にゐても仕方がない、俺と一緒に來なさい。』

彼はかう云つて自分を連れて行つた。自分は不承無承に彼について行つた。途中で

彼は自分に云つた。

『お前は却々よい心掛の青年だ、お前の持てゐるその親切を忘れてはならぬ。』

それは自分に非常な慰藉であつた。自分は何も答へなかつたが、彼は話し續けた。

『お前が拾はれた時、俺は自ら考へた、俺は此の子を養子にしようかと。然しその時はもう遲かつた。然し今神がさうするやうにした。第二回目にお前の生命を助けた、だからお前に來て一所に生活して貰ひたいんだよ。』

然し自分はどうして生活すか、誰と生活すかは、無頓着であつた。そこで自分は一向そのことには氣も止めないで、生活狀態を變へた。

暫らくして自分は新たな人々と心易くなつた、テイトヴは身長の高い色の黒い男で頭髮は兵隊のやうに短かく斬つて、髭は多くあつた。頤と頬とは奇麗に剃つてゐた。彼は餘り言ひ過ぎないやうに心配し、何か彼自身の語を疑つてゐるかのやうに徐々と話した。彼は何時も兩手を背に廻はすか、懷中に入れるかしてゐた。何か手を見られるのを恥づるかのやうであつた。この村の百姓達は皆彼を嫌つてゐた。加之、二年前マリニナの村で彼はひどく村民に撲られた。自分は彼が何時もポケットに短銃を持てゐることを聞いた。彼の妻アナスタシア・ヴァシリィエヴナアは元來美しい女であつたらしいが、持病があつてひどく痩せてゐた。彼女の貧血性な顏の眞中に太い眼球が熱いやうに輝いて、苦しさうであつた。二人の間にはオルガアと云ふ一人の娘があつた。自分より三つ年下で、その娘も顏容が青くて神經質であつた。

彼等の周圍は萬事平靜であつた、床の上には厚い絨氈が敷き詰められ、足音も聞くことが出來なかつた。誰も餘りに口數を利かず、只靜かな調子で話した。壁上に懸つて居る時計までが愼み深く響いてゐた。洋燈は何時も聖徒の畫像の前に燃えてゐた。

——最後の裁判、使徒の殉敎者、拷問臺に苦しむ聖バアバラのやうな繪像が到る處に張りつけられてあつた。部屋の一隅にある煖爐の側の椅子に艶々した煙色の大きな牝猫が綠色な眼を輝らせて、彼處此處を凝視めて横になつて居た。丁度彼は周圍の靜

平を見張り番でもしてゐるやうであつた。こんな強壓的な沈靜の中に、長い間、自分はヒラリオンの歌と小鳥の囀る聲を忘れることが出來なかつた。

ティトヴは自分を土地管理所にとり入れ、其處でやる仕事を敎へた。自分は出來る丈け骨を折つた。彼が自分を監視し、試驗してゐることに氣がついた、しかも彼は默つて、何か自分に豫期してゐる所があつたかのやうだ。自分はどうしても彼に打解けることが出來ないので不安であつた。

自分は少しも愉快な氣分はなく、その頃は全く元氣衰へて殆ど絶望の淵に沈んでゐた。——話す氣分にはなれなかつた、話したいとも感じなかつた。ティドヴと彼の妻はヒラリオンのことを尋ねたが、自分はそれに就て彼等二人に話すことを好まなかつた。そんなことを話すのは神を瀆すことゝ思つた。

自分の心は重く感覺は痺れてゐた。ティトヴ一家のやうな、いかゞはしい平靜な生活は自分の全然好まないものであつた。自分は怠らず敎會に出席し始めた。そして敎

區の小吏と新しい堂守を助けた。彼は學校敎師で、美靑年であつたが、怠惰屋の卑劣漢で、僧侶の手に接吻して、犬のやうに何時も彼の跡に屬從て走つた。彼は自分に嚙々と喰つてかゝつた。全く何等の理由もなく、只自分が彼よりかよく敎會の儀式に精通して、命じられたまゝに、法のやうに何にもかもやつて拔けると云ふので。

この頃自分は一生中大切な時期が始つた——自分の信仰が深くなつた。

一度夕の禮拜の前に蠟燭を用意してゐた時、確に繪像から聖母と基督が自分を凝視めてゐるのを見た。自分は泣いて跪き、彼等にヒラリオンのために禱つたと思ふ。自分はどの位の時間禱つたかは知らないが、それが自分の氣分を和げた、自分の心は熱して新しい生活を感じた。

ヴラッシイは聖堂內の用事で忙しく、何か譯けの分らないことを私語いてゐた。そこに自分が行つたので彼は自分を見て云つた。

『お前さんは餘程幸福らしい、銅貨でも拾つたかね。』

自分は何故彼がそんなことを云つたかを知つてゐる、自分は床の上に屢々金を見附けたから。然し今彼の語は自分の心臓を突き刺したかのやうな感じがした。

『自分は神に禱つてゐた。』と自分は答へた。

『どう云ふ神に？』と彼は尋ねた『ここには無數の神がゐる、然し生ける神は何處に存在してゐるか、木から造られない眞實の神は何處にゐるか。お前は行つてその神を探して來なさい。』

自分はそれを取るに足らぬ戯言と辨へてゐたが、その時それが自分を苦しめた。ヴラッシイは殆ど手足も自由に動かないやうな老人であつた。彼はびつこであつて何時も竹馬に乘つて歩む人のやうによろ〳〵してゐた。彼は一本の歯もなく、顔色は老耄れた乞食のやうに黒く、爛れた雙眼が飛び出てゐた。ヴラッシイに屬從いてゐる死の天使は年老つて、殆ど喪神して了つて、無意味な囈言の外何も語らぬこの老人に手を延ばすだけの力もなかつたやうであつた。

『俺は教區の小吏ではない』と彼は云つた。『然し養牧者、牧者だ、俺は牧者に生れ、牧者として死ぬ積りだ。俺は最う長くは教會には居ないで、廣い原野に行かう。』

彼が一生家畜を飼養しなかつたことは誰もよく知つて居る。

『教會は墓地のやうだ』と彼は言つた。『死の場所だ——然し自分は活きて居る場所に引かれてゐる。俺は群羊を飼はう、俺の祖先は皆牧者であつた。俺も四十二歳までは牧者であつた。』

ヒラリオンは嘗て彼を嘲笑して云つた。

『昔時、ボロスと云ふ家畜の神が居た。彼はお前さんの祖先ではなかつたか。』

ヴラッシイはボロスについてヒラリオンが知つてゐることを詳く話さした。彼が物語つた後でヴラッシイが云つた。

『それで始めて分つた！　俺は永く自分が何ものであるかを知らなかつたが、僧正を恐れてゐた、そのことに就て彼に何も話して呉れるな、堂守！　時節が到來すれば俺の

口から彼に話すから、どうかさうしてお呉れ！』

この老人は彼の主張を固執した。

自分は彼の頭腦の狂つてゐることを知つてゐたが、それでも彼が云つたことが、自分の氣持をわるくした。

『神はお前を罰しなさらぬと思へ！』と自分は云つた。

然し彼は口訾つた。

『俺は自らが神だ、へい。』

その時彼は突然に蹈臺に躓いて殆ど倒れかけた。自分はこれを天罰と說明した。

その日以後自分は敎會の仕事は何でも燃ゆるやうな熱心を以てやつた。自分は子供心に全く熱情を罩めて全心全力を捧げた。敎會に關することは何も彼も自分には聖く見えた。畫像や祈禱書のみでなく、小蠟燭、香爐は勿論、香爐の中にある灰に至るまで自分には尊く思はれた。自分は喜悅と恐怖とかごつちやになつて、凡てのものに近寄つ

た。聖堂に這入ると、自分の心は靜になり、鋪石の石までも接吻しやうとした。自分は神の眼の後光の中にあり、神は自分の步行を案內し、超人の力で自分を取卷き、人間の眼を眩惑し、彼れ以外の何物も見ることの出來ないやうな聖い光で自分を煖めてゐるやうに見えた。時々自分は眞黑になるまで一人で敎會に殘つて居た、神が宿つて居たから自分の心は熱して居た。あどけない悲哀、自分に仕向けられた惡事に對する怨恨、人間社會に於ける些細なことなどは、自分の心を動かさなかつた。神に近づけば近づく丈け、その心は人間から離れて行くものだ——勿論自分がその當時に悟らなかつた眞實の格言だ。

自分は宗敎上の書物を讀み始めた、實際自分は手に入る書物は何でも讀んだ。讀書してゐる間　自分の心は神の語の美妙優雅な音樂で充されてゐた。自分の心靈は其美妙な甘露を貪り飮んだ。感謝すべき熱い涙の泉はそれから噴き出て居た。時々自分は修道會が始まる前に、會堂に行つて三一の畫像の前に身を投げ出し、何も考へず、何

も祈らず、溢るゝ涙を漲らした。自分は絶對の無我になつて神を崇敬した。

自分はヒラリオンの言つたことを考へた。

『お前が唇を動かして禱る時、お前は空氣に禱るので、神に禱るのではない、神はお前の思想を注意するが、人間のやうに、お前の口に云ふ言語ではない。』然し自分は決して何の思想を有たなかつたが、單に神前に跪き、靜寂と樂しい讃美歌を唱へ、この世界で只一人ぼつちでなく、神に近づきその保護の下にあることを認め大に喜んだ。

それは自分にとつて光明の時期で、平和と悦樂の時代であつた。自分は好んで一人で教會にゐた。何の物音もなく私語も自分の周圍になかつた。そのため自分の全存在は靜穩の中に高潮に達し、丁度自分は人間も人類を思ひ起さすものも見ない高い所から雲に飛び上つたやうだ。

然し、老つたヴラッシイは敷石の上に足をだらしなく引摺り、風によつて動く樹の陰のやうに顫へ、齒のない口をぶつ〳〵云はせて、自分の祈禱を妨げた。

『俺は實際此所で何をしなければならぬか。この仕事は俺のやる仕事か。俺は神だ、地上にゐるあらゆる家畜の牧者だ。明日俺は野に行く積だ、俺はこの寒い暗い所で何をしなければならぬか。これは俺に適當な仕事か。』

こんな神德を瀆す彼の言葉はいたく自分を苦めた、彼が神の聖堂の神聖を瀆し、神は神聖な聖堂で彼を見て心を傷め玉ふに相違ないと思はれたから。

自分の敬虔な心と宗教上の熱心とは驚くべきもので、教區の僧侶が自分を見て高笑をしだし、そして何時も冷かな汗じみた彼の手にキッスする間、彼は特別な祝福を與へたものだ。自分は彼が神の奥意に精通してゐるのが妬ましかつたが、彼を好かなかつた、何時も彼を恐れて居た。

然しティトヴは小さなだるさうな、扣紐のやうに顏面にくつついてゐる眼をして漸次近寄つて來て自分を吟味する癖があつた。皆のものが硝子にでも觸るやうに注意して、穩かに自分を扱つた。小さなオルガは屢々云つた。

『では、貴方は聖徒になる積りなの？』

彼女は自分が親切にする時でも、聖徒や宗教上の物語をして聞かす時でも、自分には餘程遠慮してゐた。冬の夕、自分は「プロローグ」とか「ミネイヤ」とか云ふやうな祈禱書の抜萃を讀んだ。戸外には暴風雪が野原を渡つて吹き荒み、壁に突當り呻り喚んでゐたが、室内は靜かで誰も身動もしなかつた。テイトヴは誰にも顔の見えぬ程に首垂れて居た。アナスタシアは驚いて自分を疑視めた。小さなオルガァは夢幻であつた。雪がばら〳〵と響いた時、彼女は周圍をきよと〳〵と眺め廻はし、自分の方を見て微笑んだ。時々彼女は自分が讀んでゐた書物の中にある文句を理解することが出來ないので、その意味を尋ねた。彼女のやさしい小さな聲が室に滿ち、また元のやうに靜肅になつた。只戸外に吹風雪の響がした、それは野原を渡つてさら〳〵と音のする翼で、急いで休息の場所を捜すかのやうであつた。

神のために戰ひ、神の威力を、生前に於てのやうに死後までも證明する神聖な殉教者

達が自分の心に尊くあつた。人類に慈善をなす柔和な同情に充ちた聖徒や、告白者が自分に深い印象を與へた。然し自分は全く神のために、この世を棄て、洞穴や沙漠に住み、惡魔の誘惑と戰つてゐる苦行者や世捨人の氣持を、どうしても理解することが出來なかつた。

ヒラリオンは惡魔の存在を否定した。然し自分はそれが存在しなければならぬと考へた。聖徒達の生涯はそれを證明した。惡魔が居なければどうして吾々は人間の墮落を理解することが出來るか。ヒラリオンは神を單に全能なる世界の創造者と信じてゐた。神は櫻子を造つたが、惡魔は蒭を造つた。神は驚を造つたが、惡魔は蛇を造つた。

此の場合は全くこれであつた。よし自分は惡魔の存在を許したにしても、惡魔が自分の信仰に何の關係もないことを認めた。加之、自分は惡魔を恐れなかつた。それは惡の存在を說明する上に役に立つた。然し同時に神の偉大を蔑視するを見る時に憎惡

の念を高めた。自分はそのことに就て出來る丈け考へないやうにしたが、テイトヴは何時も罪惡と惡魔の力の方に自分の思想を向けさした。

例へば、若し自分がダヒデ王が誘惑され易きことを告白した頌を讀む時、彼は直にこれに反對した。

『さう、彼も亦罪惡に征服された、彼は國王であつた。惡魔が彼れよりか强いことを證明したではないか。若し國王自身でさへさうとすれば、吾々のやうな憐れな人民はどうしてそれに反抗することが出來るか。』

彼は屢々こんな話題をひき出した。自分は彼が云つたことを理解しなくても、彼の物語は何時も自分を喜ばすものでなかつた、同時に百姓は漸々自分が信仰に厚いことを噂するやうになり、屢々テイトヴが自分の耳に囁いた。

『俺と一家族の爲に熱心に禱つてお呉れ、心からお願ひするよー　お前を俺の家に連れて來て育てた報酬さ。』

その時まで自分の祈禱には目的がなかつた、自分は鳥が太陽に歌うやうに神に禱つた。然し今自分はテイトヴと彼の妻のために禱り始めたが、小さなオルガアの爲にはあらん限りの熱心を罩めて禱つた。彼は柔和な可愛らしい少女になつた。自分は讃美歌作者の語句や自分の知つてるあらゆる他の祈禱書の中にある文句で神に禱つた。こんなやうな韻律のある文句を聲高く繰返へすことは自分に唯一の喜悦であつた。尙充分おかしなことに、直接に自分は祈禱の中にテイトヴを指名して云つた。

『おゝ威靈高き神さま、あなたの仁慈を僕エコアに垂れさせ給へ。』――自分の心は戰へた。自分の祈禱の流が突然に止つて、輝く喜悦は鈍つた。自分は神の前に耻しく感じ、もう祈禱を續けることが出來なかつた。

自分は畵像の基督を見ることを避けるため視線を下げた。自分は起ち上り、半ば悲しみ、半ば當惑した。自分は何處からこの感じが來たかと云ふ疑問に惑はされた。自分はそれを理解しようとして失敗した。自分は祈禱の喜悦がこの男の爲に自分の心か

ら離れたことを深く悲んだ。

四

村人は自分の行動を漸々注目しだした。

自分が日曜日や祭日に出掛けた時、村人は好奇心を以て自分を眺めた。嚴肅な挨拶をするものもあれば、笑つて挨拶をするものもあつたが、自分の擧動に注目しないものはなかつた。

『おい〳〵、例の祈禱商人がやつて來る！』とあるものが云つた。

『やい、マトヴさん、お前は聖徒になる積りかい。』

『笑ふな、青二才達！彼奴はまだ坊主ぢやねえぞ、錢の爲に神を信仰しねえんだよ。』

『一度百姓であつた聖徒も居たではないか。』

『善いものは皆吾々から來るが、然しどうだ、吾々にどん丈けの利益になる。』

『では、彼は百姓であつたか、彼は私生兒の小公子だ！』

彼等の話はこんなやうなものであつた、半ば戯談で、半ば惡意であつた。

當時自分は妙な氣分になつた。自分はあらゆる人類と平和に生活したく思つた。そして皆なのものが自分に親切であることを願つた。さう云ふやうに出來る丈け骨折つて見たが、善良な計畫は無效に歸した。サベルコ・マイガスは自分に戯弄つた、彼は自分を見るや否や跪き、平伏してこんなことを云つた。

『拙者は神聖なるあなた樣の前に平伏します、どうか全能の神にこのサベルコを壓碎かないやうにお祈り下さい。拙者はどうすれば神を喜ばし得るかを知りたい。拙者は全然竊盜を止さうか、或は平氣でもつと惡辣にやりませうか、一對の蠟燭を燃やして拙者の心靈を救ふことが出來ませうか。』

人々は笑つた、然し自分は彼の諧謔を適はしからぬものと考へたので、その爲め苦しめられた。

然し彼は至極冷靜に話を續けた。

『諸君の頭をこの信仰厚き青年の前に下げ！　正統派の諸君！　成程、彼の事務所で巧く百姓達を欺いてゐるが、一方に於て彼は神に達する彼等の悲歎を妨げるために聲高く禱つたり歌つたりしてゐる。』

當時自分は十六歳であつた。自分はこの哄笑の語の代りに、サベルコの口を碎ける程打つことが出來たかも知れないが、彼を避けることを撰んだ。彼はそれを見て漸次自分を輕蔑するやうになつた。彼は歌を作つて休みの日に彼のバラライカに合せて歌ひながら街道を步き廻つた。

『若い貴族の戶口に捨てられた嬰兒は
直に拾ひ上げられ、そして、
農夫の血を搾るその家に、
聖き平和の家庭を發見す。』

この歌はかなり長かつた、皆のことが歌ひ込んであつたが、殊にテイトヴと自分のことが多かつた。サベルコは自分に極めて無法な擧動をした。それで自分は彼の極少ない鬚や、禿頭や、耳上に無作法に乘つかつてる帽子を見ると手足が慄へた。自分は彼に突進して皮膚の下にある骨節を一々粉碎してやりたくて堪らなかつた。

自分はまだ年が若かつたが、自分の感情をよく制へた。彼が何かぶつ〳〵と囁きながら、自分の後をつけて來ても、彼の毒罵に氣附かぬやうな風を裝ひ、丁度何にも聞かないやうな風で徐々と步んだ。

祈禱の外に何ものも自分の心靈を保護するものがないと感じたので、愈々熱心に神に禱つた。然し苦々しい言葉と非難が、神に對する祈願の中に這入り込んだ。

『何故、あなたはそんなに嚴酷に自分を試み玉ふか、批難し、生籬の中に小猫のやうに投げ玉ふか。』

自分はその他に如何なる缺點をも認めなかつた。自分は人類を荒々しい錯亂した生

活の中に蹲き、各自特殊の仕事と、彼等を支配する法律の力を持つて居る、彼れ自身の習慣に心を奪はれて居るものと見た。その當時自分はどうして、この世界と一般人間に對する自分の關係を理解することが出來たか。

然し自分は心靈上の苦痛が加はつて來たので愈々深く事物を研究しだした。

自分等の土地の領主コンスタンチン・ニコライヴッチ・ロセヴは金滿家で廣大な領地を所有してゐた。彼がこの村に來るのは極めて稀れであつた。この村は彼の一家に不吉の場所として注目されてゐたからだ。ロセヴの母堂は此地で何者かに絞殺され、彼の祖父は馬上から墮ちて死んだ。彼の妻が駈落したのも此處からであつた。たつた二度しか自分はロセヴを見たことがなかつた。彼は身長の高い强健な男で、金緣眼鏡をかけ、役人服をつけ、赤で飾つた帽子を被つてゐた。彼は宮庭の高官で讀書もし著書もあつたと云ふ噂であつた。屢々ロセヴはテイトヴを叱責し、加之、彼の顏に鐵拳を加へたこともあつた。

テイトヴはソコール村の管理について唯一の重要な人物であつた。その領地は廣くはなかつた。保管者のために要する以外の穀物は耕作されず、其他の土地は百姓に貸し附けてあつた。その當時借地年期を改めて繼續することが出來ないと云ふ命令が來た、然しその附近に紡績工場が出來たから亞麻が蒔かれることになつた。

自分の外に、イヴン・マカリッチ・ユーディンと云ふ至極遠慮勝ちな男がその管理所に勤めて居た。彼は何時も素面のことはなかつた。電信技手であつたが、酒のために解職された。彼は總ての帳簿を監理し、手紙を認め、百姓達との契約書を起草し、不思議な程默つてゐた。若し誰か話しかけるものがあると、彼は單に點頭いて、輕くくすゝゝと笑ひ、精々「よろしい」と答へた。

彼は身長が低く瘠せて、その顏は圓くぷうと脹れて、眼はやつとあき、頭は丸坊主であつた。彼は盲人のやうに足の指先で音をさせないで、ぐらゝして歩んだ。

カザンにある聖母の祭典に、百姓達に燒酎を飮まされて死んで了つたので、自分

はたつた一人その管理所に殘され、テイトヴから一年四十留の給金で、凡ての事務を引受け、オルガアが手傳ふことになつた。

自分は以前に百姓が窪の周圍にある狼のやうに、此管理所の周圍に獲物を捜すのを見た。狼は窪のかけてあるのを見たが、飢えて居たので、餌食にひきつけられ、それに咬みついた。

自分は管理所に一人で凡ての帳簿や計書を處理してゐた時、僅か許りしか經驗がないのにも係らず、領地の管理人は公然の盜賊であることを直ぐに認めた。百姓達は重荷を負はされて、皆借金で首が回らなかつた。で、彼等は自身のためでなく、テイトヴのために働いた。自分はそれを驚いたか、恥かしく感じたかは云ふことが出來ぬ。その時自分は何故何時もサベルコが自分を罵り侮るかを理解した、——勿論自分は彼にさういふ理由を與へなかつたが。盜賊を教唆したのは自分であつた。

自分はテイトヴが彼の雇人を欺き、あらゆる才智を搾つて彼れ自身の懐中を温めてゐたことに注意した。この以前自分は彼から種々な特權を取ることが出來た、彼には自分が居なければならぬことを知つて居たから。そして自分はその理由を理解した。——彼は神の眼前から彼の惡事を隱蔽する爲に自分を必要とした。

テイトヴと彼の妻は一緒に縛かれた一對の馬のやうに、頭を垂れて神前を歩んだ。彼等は非常に戰々〳〵してるので、盜賊よりかもつと重い罪惡でも隱してゐたやうに見えた。自分はテイトヴの手を嫌つた、彼は何時もそれを隱した。それが恐ろしい疑惑を起さした。多分その手は人間を縊り殺し、血で汚されてあつた！

彼等夫妻は何時も云つた。

『どうか、吾々罪人のために禱つてお呉れ、モディカー』

ある日自分は制へ切れなくなつて、こんなことを云つた。

『あなた方は普通の人達よりかもつと罪惡が多いんですか。』

アナスタシアは太息して退いたが、テイトヴは返答しないで起ち去つた。

テイトヴは何時も熱心に考へ込んでゐて、妻や娘にも餘り口をきかぬ、若し口をきけば事務のこと許りであつた。彼は決して百姓共を侮辱はしなかつた、然し彼等に對する傲慢な態度は罵言するよりか、もつと彼等を憤らした。テイトヴは少しでも讓歩しなかつた。若し彼が一度かうと云つたら、腰まで土中に埋められてあつたかのやうに固執して動かなかつた。

ある場合に自分は彼にかう云つた。

『あなたは、このことに就ては、彼等の云ふことを容れなければなりますまい。』

然し彼は答へた。

『どうして、一歩だつて後へは退けないよ、でないと彼等が莫大な利益をするからな。』

他の場合に於て彼は自分に勘定を僞るやうに望んだ、自分は彼に云つた。

『それは不正です！』

『なぜか。』

『それは罪惡です。』

『罪を犯すやうに、お前に強ゆるものは俺で、お前が俺のためにするのではない、俺がお前に話す通り書け、誰もそのためお前を呼んで勘定さすものはない、お前は只俺の手だ。信仰に厚いと云ふ評判が、そのため傷けられると云ふやうなことを心配するな、お前は、俺が——他の誰れにしても——一ケ月僅か十留の給金で正直に生活することが出來ないと云ふことを知らなくちやならぬ。』

『おい！　貴樣は詐欺師だ、惡漢だ！』と自分は一人で考へた。その時自分は直に彼に云つた『これで充分だ、これは止めなくちやいかん、若しあなたがそんな破廉恥なことを斷行すると云ふなら、自分はあなたの惡事を殘らず村人に話します。』

彼は髯を鼻の上まで捻り上げ、耳まで肩を聳かし、齒を露出し、圓く見張つた眼で自分を睨めつけた。二人はどちらが勝つか互に根並べをした。

『お前は實際そんなことを云ふ積か。』と彼は低い聲で云つた。

『え、話す積です。』

テイドヴは笑つた。彼の笑聲は一握の銀貨を地上に投げ附けたやうに響いた。その時彼は云つた。

『よろしい、小聖徒、それは自分がやらなければならぬ所のものだ。以後吾々は異つた方法で事件を處理しよう、吾々はコペック（一留の百分の一）に心配しないが、留に意をつける。盜賊はもう何も盜むものがないと見ると、正直をやつて見る。』

彼は出て行つて非常に激しく戸をパッタリと閉ぢたので、窓戸の蝶番が、がらがらと鳴り響いた。

その時から、テイドヴは一層正直にやるやうに見えたが、自分はそれを充分に信じなかつた。兎に角彼は自分に安心さした。

彼は非常に客嗇であつた。よし彼が何等の嗜好を持たないにしても、確に金の價だけはよく知つてゐた。彼は富裕な生活が好きで、非常に女好きであつた。彼はその界

隈で幅を利かしてゐたから、村には彼を拒ける女は殆ど皆無であつた。彼は處女には關係しなかつたが、結婚した婦人にのみ目をつけた。屢々彼は自分を誘惑して墮落させようとした。

『どうして、そんなに克己するのか、大膽に幸運を捉へ、女をつくるのは慈善事業だ、此邊の女は大抵愛に飢えて吐息をついてゐる。彼等の夫は弱くて少しも役に立たぬ。どうして女に滿足さすことが出來るか。そしてお前は美少年だから、肱鐵を喰ふことは決してない。』この破落戸はどんな惡事でも勝手な見解をくつつけて行ることが出來た。一度、彼は自分に云つた。

『お前は何を考へてゐるか、マトヴ！お前のやうな信心の深いものは、神の利益をたんと受けないものかね。』

自分はこの種の疑問を好まなかつた。

『そんなことは知らん。』と自分は答へた。

彼は暫時考へて話し續けた。

『例へば、神はソドムからロトに導きノアを救つた。然し多數の人民は火と水によつて死んだ。それに聖書には「爾等殺人をなす勿れ」とある。多數人民の中に二人が正義であり、神を畏れたばかりで、此等多數の人民が滅亡したと云ふことが屢々自分に浮んだ。然し神は彼等に與へた誡が嚴しいのにも係らず、あるものが聖き生活をなし得るのを見た。若しソドムに一人の正しい人間がなかつたら、神は誰もその法律に從ふことが出來ないものと見て、恐らくは、多數の人民を破滅の運命に陷れないで、彼等を恕したかも知れぬ。でも吾々は神を「慈悲深い」と云ふ、然しこの場合何處に神の恩惠がある?』

自分は、その時この男が只罪惡に對する辯解を求めてゐることを悟らなかつた。然し彼の云つたことは自分の憤怒を刺戟した。

『お前さんは不敬なことを云ひなさる』と自分は答へた『お前さんは神を恐れてはゐるが、神を愛してはゐません。』

彼は衣兜から兩手を引き出し、鋭く彼の後部に置き、非常に敏活に振向いた。彼が激して居たことは明かであつた。

『俺は果してさうであるか否かは知らぬ』と彼は言つた、『俺は只神は他のもの丶罪惡を秤る尺度として、お前のやうな、信仰の厚い人間を用ゐることを信ずる。でなければ、神は罪惡を裁くに困るだらう!』

それから大分後まで、彼は自分のことに注意しなかつた。然し彼に對して制へきれない憎惡が自分の心に起つた。自分はサベルコよりか彼を憎んだ。一夜自分が祈禱の中で彼の名を云ふやうになつて來た時、自分の心は憤怒に充たされた。これが自分で作つた最初の祈禱であつた。

『盜賊に對して恩惠を垂れ給へと强ゐては願ひませぬ、神よ、然し彼を罰して下さい、彼が罪なき貧乏人から强奪しないやうにして下さい。』

自分はテイトヴに反抗して、神に一心に祈つた。その爲め自分は彼の運命が心配になる程であつた。

その後直ぐに自分はまたマイガスに出逢つた。彼は自分が一人であた時、シナノキ綱のことで、管理所にやつて來た。

自分は彼に云つた。

『何故、お前さんは何時も自分を愚弄するかね、サベルコ！』

彼は齒を露出して、その刺し通すやうな鋭い眼で自分を窺み見た。

『俺は重要な用事はない、只小ざなシナノキ綱のことを尋ねに來た。』

自分は手足が戰ひ、指は無意識に握りしめた。自分は彼の咽喉を捉へて、輕く搖震つた。

『何の惡いことをしてこんな目に逢うのかね。』

彼は驚きも怒りもしなかつた。然し單に自分の手を捉つて彼が自分よりか强者であるかのやうに、咽喉から、手を取り除けた。

『お前が咽喉を絞めてる間話すことは難しい。構はずに居いて呉れ、俺はもうこれ迄充分に打擲を受けたから、お前からまでやられなくともいゝ。加之、お前は特別に誰でも打てはならぬ、戒律を犯すことになるからな。』

彼は低い聲で、靜かに戲談のやうに云つた。

自分は彼に叫んだ。

『お前は此處に全體何の用事がある？』

『シナノキ綱の小片のことで。』

自分は彼が話し相手にならぬことを知つた。それで憤怒の發作が消え去つて了つた。

自分の只一つの感情は自分が此奴に輕蔑され且つ反抗されたと云ふことであつた。

『お前達は何うしても惡獸だ』自分は云つた、『どうして人々は父に薬てられたと云ふために自分を侮辱することが出來るか。』

彼は多くの石を投げつけるやうに、諷刺を浴せかけた。

『おゝ、ペテン師の、いたづらもの！
俺らは吠聲をきいて犬と知る。
お前は盜んだパンで肥とる、
何に食はぬ顏して。』

『お前は虛言者だ』自分は叫んだ、『自分は麵麭のために働く。』

『古の諺に、一羽の牝雞でも骨を惜んでは盜むことは出來ぬと云ふことがある！』

彼は惡魔然たる冷笑をして自分を見詰め、同情のあるやうな聲で云つた。

『あゝ、マトヴ！　曾てお前は如何にも善良な子供であつた！　然し今ではお前も書記だ、神の侮辱者だ！　この國に居る凡ての盜賊と同じやうに、不幸にも凡ての人間が一樣に皆長い手を持つてゐないと云ふ事實で、お前の宗旨をいやしめてゐる。』

自分は事務所から彼を逐ひ出した。自分は彼の冷語を理解しようと願はなかつた。

自分は尙神の眞の下僕と考へてゐた。他人の判斷よりは自分のそれに信賴した。自分は淋しく不安であつた。して自分の精神上の力が衰へ行くのに氣がついた。

自分は神に向つて人間に關する不平を云はなかつた。自分は僞善者でなかつたが、それが出來なかつた、餘りに卑劣であるやうに思はれたから。自分は自分を責むべきものを有たなかつた。自分の心靈は公明正大少しも疾しき所なく。神の前に開かれてあつた。自分はアバラズクの聖母の畫像の前に跪いて、天の方にやせた兩手を上げてる彼女の容貌を注視めた、そして自分は畫像からある影が默つて出て冷かな呼吸をして自分の心に觸つたやうに想像した。その時自分と神との間に、何にか見えない妙なものが起り苦悶に充たされた。自分は祈禱につき凡ての喜悅を失ひ、悲痛が自分にくつつき、オルガアが居る處でも慰安がなかつた。

五

オルガアはだん〳〵自分を親切に眺めだした。その時自分は十八歳で、褐色の髪、青い顔の美少年であつた。自分は漸次オルガアに近づきたいと思つたが、未だ無邪氣であつたから、恐氣がついて來た。近所の女どもはそれを見て自分を嘲り笑つた。折々自分を苦しめたオルガアにも微笑を見るやうに思つた。また自分は無我夢中になつて考へた。

『彼女を妻にしたら、どうだらう?』

自分は終日續けさまに管理所で彼女の側に默つて坐つて居た。折々彼女は事務のことに就て問をかけ自分はこれに答へた。我等兩人の會話はこれ以上に進まなかつた。彼女は若い赤楊のやうに立派でしなやかで、溶けるやうな青い眼をして居た。彼女には優しい陰鬱の中に美しくはれ〳〵するものが通つて居るやうに見えた、それが自分

の心に餘程變に映じた。

一日彼女は自分に言つた。

『どうして貴方は、そんなに、鬱ぎ込んで居らつしやつて、マドヴさん!』

自分は誰にも自身のことを打ち明けなかつた。その時にも自分は沈默を破ることを好まなかつた。然し自分は突然に胸奥を開いて、悲哀を惹き起すものを、殘らず彼女に打ち明けて了つた。自分は兩親のために辱められたこと、嘲笑の的になつてゐたこと、自己心中の寂寥と苦痛、加之、彼女の父について流布する凡ての物語を話した。自分のことについては何も不平を言はなかつたが、然し單に自分の胸奥に蓄へて居る最も秘密な思想を彼女に知らした。それ等は皆價値の少ないものであつた、そしてそれが價値のないことを考へて苦んだ。

『自分は僧院に入つた方がいゝだらう。』と自分が言つた。彼女の顔に一つの暗い影が現れた、彼女は頭を垂れたまゝ答へなかつた。彼女の沈默は自分を悲しましたが、彼

女の悲哀は自分を喜ばした。

それから三日許り經つてから彼女が自分にさゝやいだ。

『世間の人さんが言ふことを其樣に氣にするのはよくないんですよ、マドヴさん、銘々自分の爲に生活して居るんですもの、私だつて貴方が今ではこの世界にたつた一人法師でゐらつしやることを知つて居ます。然し貴方が家庭をお持ちになれば、誰にももう用はない、貴方自身の家庭で貴方自身の屋根の下で、他の人達と同じやうに生活することが出來ますよ、私の父のことを判きなさるな、誰一人彼を好いてゐるものがないことを私も知つて居ます。それでも私は何の點で父が他のものよりか取譯け惡いのかゞ分りませんの、一體人間は何處で愛に出會ふことが出來るでせうか。』

彼女の一語一句は、悉く慰安を以て充されてあつた、そしてこの場合に於て、自分は何時も迅速に日々の事務を裁決するやうに、何の捜りも入れないで、突然彼女に持ち込んだ。

『お前さん、自分と結婚して呉れませんか。』

彼女は顏をそむけて、さゝやいた。

『はあ。』

二人の間はこれで定つた、翌日自分はティトヴに、オルガァと自分とはお互に將來を誓つたことを語つた。

彼は笑ひながら髭を撫で自分に難題を持ち掛けた。

『ではお前は俺の婿になりたいんだね、それは何でもないことだ、マドヴ！それは神樣のお思召とも考へられる。俺はその婚約に反對はしない。お前は沈着いた愼みの深い、强健な靑年だ、お前は俺達の爲めに神に禱り、何れの點から見てもなくてはならぬ寶だ。これはお世辭でも何でも無い。然し愉快に生活するには、人間は事務のことを理解しなければならぬ、その方面に於てお前はまだ熟達して居ない。これが第一の缺點だ。次にお前は二ケ年以內に徵兵に行かなければならぬ、これはどうしても避け

ることが出來ぬ、これが第二の缺點だ。それで、若しお前が僅か許りの金、五百留を貯蓄したなら、お前は兵役を免除されるかも知れぬ、俺はこのことを取極めて置きたいのだ、……然し若しその金が出來なければ、お前はオルガァを妻ともつかず寡婦ともつかず、殘して行かねばなるまい……』

彼の愚かな物語は自分を狂ひ怒らしめた。彼の髯は顫き、綠色の光が彼の眼中に閃いた。自分は兵役とはどんなものであるかを自ら描いた、その想像は恐るべきもの厭ふべきものであつた。何んな種類の兵卒にならなければならぬか。泥酔、淫猥、喧嘩口論は言ふまでもないが、兵營内で多くの人間と一緒に生活しなければならぬと云ふ簡單なる事實さへ自分には堪へ難き苦痛だ。自分は兵役の厭ふべきものなることを告げられ、テイトヴの話が烈しく自分を失望さした。

『では、自分の行くべき唯一つの道は僧院に這入る丈です。』と自分は言つた。

『それにはもう遲い、お前が僧院に行つても直ぐには僧侶にしない、若し新發心になるならお前は屹度徴發される。マトヴ、この運命を免れるには贈賄の外に途がない。』

とテイトヴが答へた。

自分はかう云つた。

『その場合にはお金を戴きたいものです、あなたは澤山お持ちだから。』

『はあ、はあ』と彼は云つた、『それがお前の計略か、それが俺に出來るかどうかは疑問だ。かう云ふことを心の中に有つて居てお呉れ、俺は極惡の罪業によつて金を蓄め、恐らくは金の爲に惡魔に自分自身を賣つた、俺が罪惡の泥中に埋められて居る間、お前は正直な生活をしてあつた、尙俺の罪惡の價で以て正直に生活することを繼續したいであらう。天國に入ることは正直な人間には難しいことではない、――若し罪人が彼の背中に、その人を運びさへすれば。今のやうな遣り口ではお前の用にたゝぬ、一層思ひ切つてすることをやつ付けた方が得策だらうて、神さまは屹度お前の罪を容して下さると思ふ。お前は前以て神さまのお許しを得て居るから。』

自分は彼を凝視めた。彼が忽ち頭と肩を塔のやうに、吃立てるやうにしたので、自分は全く彼の足下に平伏したやうであつた。自分は彼に侮辱されてあつたことを覺つたから、會話を止めて了つた。その夜自分はオルガアに彼女の父が言つたことを繰返へした、涙が彼女の兩眼にきらめき、耳の邊にある小さな青い血管が動き始め、その動悸が自分の心臟に反響した。でもオルガアは微笑して云つた。

『何んでも思ふやうには行きませんわねえ。』

『然し』と自分は答へた、『最後には皆うまく行くさ。』

自分は思はず、さう云つたが、然し自分は婚約を保證し、それを破る氣にはどうしてもなれなかつた。

その日から自分は不正直な生活を始めた、それは長い流連のやうに、自分にとつて暗黒毒惡の時代であつた。自分は失火の爲め煤煙の雲中に羽搏きをしながら、恍惚して居る鳩のやうであつた。自分はオルガアのことで面白くなかつた、その女を愛し、

妻にしたいと思つた。何よりか惡いのは、ティトヴが自分よりか強く頑固であつたことを自分で認めたことであつた。そのため自分の誇慢心は堪へ切れなくなつた。自分は彼の奸曲と不正な心を輕蔑したが、いま自分は彼の手中に何にか自分を壓服するやうな力を有つてゐることを發見した。

村のものどもは自分がオルガアに結婚を申込んで、拒絶けられたと云ふことを直に知つた。

この村の娘達はそれについて自分を嘲り笑つた、家婦達は私語いて居た、そしてサヴエルコは自分の感情を畏縮さすやうな言辭を思ふ存分浴せ掛けた。自分の全存在は暗黒の深淵に沈んだ。

自分が祈禱つてゐた時、ティトヴが自分の背後に起つて居たらしかつた。自分の首の邊に彼の呼吸を感じた。それが自分の敬虔な祈禱を奪ひ、これを錯亂した。自分は神に祈る氣もなかつたが、然し自分一身上の俗事——自分はどうすればよいかと云ふ

ことに就て沈思して居た。

『神さま、助力を垂れ玉へ、私はあなたの道から離れることのないやうに、私の心靈が罪惡の中に沈むことのないやうに、私の心を照させ玉へ、あなたは全能の力を有し慈悲に滿たせ玉ふ、それ故惡魔からあなたの下僕を護り、誘惑に對して戰ふ力を與へさせ玉へ、私が敵の奸計に征服さるることのないやうに、あなたの愛の力に關する疑惑が私から消え去るやうに。』と自分は叫んだ。

自分は瑣細な日常の困難に關し神が自分の保護者となるやう、神を言ひ表し難き至美最高の頂上から、引き下げやうと思つた。こんな工合に神を侮辱して置いた後で、自分は自らを鄙み平伏した。

一日一日とオルガアは痩せ衰へた、自分は彼女が他の男と生活して居るものと考へようとした。然し自分は彼女一生の保護者として自分の外に如何なる人をも描くことが出來なかつた。

人間は愛の力に依て彼の中に「他の自我」(アナザア、セルフ)を創造するのだ。自分は彼女が吾輩の心事を理解し、思想を讀み、自分が自分自身に缺くべからざるものであるやうに、彼女の必要であることを信じた。彼女の母は漸々陰鬱になつて涙と嘆息で自分を凝視た、然しテイトヴは彼の忌むべき手を隱し、そして自分の周圍をそつと行いて死にかけた犬の上を飛び廻り、若し犬の息が切れたら直にその眼を引き拔かうとして居る烏のやうに徘徊いて居た。殆ど一ケ月を經つた、自分の境遇は依然元のまゝで、丁度嶮しい斷崖絶壁の端に達したやうに、どうして其處を通過すべきかを知らなかつた。自分の心は心配で壓迫されてあつた。一日テイトヴが事務所に來て低い聲で自分に云つた。

『マトヴ、お前の爲に好機會が到來したらば、この好機を逸してはならぬ。』

好機會とは百姓共が損失をし、地主が少し許り利益をし、テイトヴは二千留を懷中すると云ふのであつた。

彼は何うすればよいかと云ふことを自分に説明した。

『さあ、お前はそれをやる充分な勇氣が出たか。』

若し彼が他の異つた方法で尋ねたなら、恐らくは自分はその係締に陷らなかつたらうが、彼の言語が自分の心を動かした。

『盜賊の勇氣ですか』自分は答へた『勇氣でなく卑劣はその爲に求められる丶凡てだ。宜しい、では一つやつて見よう。』

例の破落漢が笑つて云つた。

『そしてその罪業は？』

『自分で自分の罪を償ひませう。』

『では宜しい』と彼は云つた『さて一日一日とお前の結婚期が近いて來るものと考へて居なさい。』

彼が自分をその係締に引込んだのは、かう云ふ工合であつた。恰當寓話にある狼と

小羊との場合のやうであつた。

それから兩人はその計畫に着手した、自分には事務の頭腦があつて、何時も向ふ見ずに突進した。兩人は百姓を欺く手段に就いてお互に爭ひ始めた、丁度二人は互に將棋をやつて居るやうだつた。若し彼が一歩を動けば、自分は一層大膽に動いた。兩人は默つて働きお互に睨み合つて居た、彼の眼は意地惡く閃めき、自分の眼は憤り輝いた。彼は自分との決鬪に勝利した。然し若し自分が失敗した時、自分は特に不正直の點に於て彼に後れを取るまいと思つた。自分は亞麻を賣れば目方を騙したり、押收された家畜の損害賠償を私消したり、種々な工夫を運らして、百姓の金を强奪した。然し自分は少しもその金を懷にしないで、殘らずテイトヴの懷中に投げ入れた。それは確に自分のためにも不幸な百姓どもの爲にもならなかつた。

つまり、その時代の自分は宛然狂人のやうであつた。自分は悶えて、窒息した。自分が神のことを考へた時、焦きつけられるやうな感じがした。そして自分は屢々こん

なやうなことを云つて神を詰つた。

『何故、あなたは、強い手を持ちながら、私を墮落から助け下らなかつたか。何故あなたは私の力量以上の試練を加へましたか。おゝ神よ、あなたは私の靈が滅び行かんとするのを御覽になりませぬか。』

大分時日が經つた。オルガアまでも自分には他人であつた。自分は彼女を見て非常に苦しくなつて考へた。

『不幸な娘！　お前の爲に、自分は自分の心靈を取換へて居る。』

その時自分は耻しい氣持になり、出來る丈け彼女に親切に柔和しくした。

然し自分は自ら苦しみ、齒を噛み碎いた。それは自分自身又はオルガアに對する哀憐のためでなく、然し自分がテイトヴを征服することが出來ないことゝ、彼の意志に服從しなければならなかつたと云ふ單純な憤怒のためであつた。彼が屢々敬虔な人民に就て話した言語を想ひ起した時に、自分の血は冷たくなつた。

彼は大恐悦で自分に云つた。

『あゝ、俺の愛する小聖徒！　お前自身の隱れ家を求める時だ、俺共はお前が妻を持つ時を餘り嚴重に束縛することは出來ん、お前は小供を持つからな。』

彼は自分を聖徒と呼んだ、自分は默つて居た。

彼はその名で愈々多く自分を呼んだ。然し彼の娘は漸々と自分に愛情細かに柔しくなつて來た。彼女は自分の心にある重き苦痛を知つて居た。

その時テイトヴは拜み倒にして、ロセヴの代理者を巧に籠絡して僅か許の土地を得た、彼は丁度貴族別莊の裏に可成の地所を讓受け、吾等二人のために小さな住宅の建築に着手した。自分は相變らず、百姓を欺いたり苦しめたりして居た。自分は萬事風向きが順くなり、金は蓄り、家宅は新築され、それが日に照りつけられて、小さなオルガアのために鍍金した籠のやうに輝いてゐた。既に屋根は葺かれ、煖爐は設置けられ、秋までには棲まはれるやうな運びになつて居た。

一夜、自分がヤキモヴカと云ふ村からの歸途であつた、——そこで自分は貸金の代りに百姓の家畜を奪つた—自分が小さな林に這入つた時、丁度日沒に、自分の家屋が蠟燭のやうに燃えて居るのを見た。

最初自分はそれを單に太陽の反射であると思つた。その赤い光線が我家の周圍を包み、天空の方にそれを運んだ、然し自分は人々が駈けつけるのを見、人々の叫び聲と火焔の爆聲とを聽き取つた。

自分の心は殆ど裂けんばかりであつた、神が自分の敵なることを認めた、若し手頃の石があつたなら、自分は屹度、天空に向つてそれを投げつけたに違ひない。自分は天空に煙と灰とになつて上る不正直の產物を見詰めて自ら憤つた。

『おゝ神さま、』と自分は叫んだ『あなたは、私が塵と灰との爲に自分の心靈を破壞したと云ふことをお示しにならうとするのですか。私はそれを信じませぬ。私はあなたの屈辱を望みませぬ、家が燒けつゝあるのは、あなたの意志でない、然しディトヴと

私に對する怨恨から、百姓が放火をしたのであります、若し私がそれをあなたの憤怒の結果であることを否定しても、それは私にそれに相當するだけの罪業がないと云ふのではなく、あなたの憤怒があなたに相當しからぬ爲めであります。あなたが、この弱い私の危期に際し、心靈の救助を拒まなかつたなら、よくそれに抵抗し得たかも知れなかつた。それで、私でなく、あなたは詰責を受けなければならぬ、私は人が暗黑い森林に這入るやうに、罪惡の道に這入つて全くそれに包圍されて了つた。どうして、私はそれから脫することが出來ますか。』

然し恁麼な馬鹿氣切つた言語は自分の心を慰めることも、自分を辨明もしなかつた が、自分の心中に不信心な反抗心を燃した。

自分の家屋は自分の憤怒が消え失せない前に燒き盡されて了つた。自分は樹に凭れ掛つて、憤怒を靜めようとして、森林の端に一人立つて居た。其處にオルガアの青い顏が涙に浴び、悲愁の爲め憔悴けて自分の前に起つて居た。

無禮にも、自分は神が自分の朋輩でゝもあるかのやうに話しかけた。

『若しあなたが強ければ、私も強いです、それは當然のことであります。』

家が焼けて了つて、其邊が今一度眞闇になり、沈靜になつた。丁度小兒が泣き止んだ後で、呟んでゐるやうに、たつた焔の二枚の舌が眞闇の間に動いてゐた。それは曇つた夜で、河は野原に投捨てられた彎曲つた閃々した劍のやうに輝いて居た。自分は地上に嘯々と云ふ音響を起さしめん爲に、それを捉へて空中に抛投げたかつた。自分は眞夜中に村に歸つた。オルガアと彼女の父とが貴族の別莊の戸口に起つて、自分の歸るのを待つて居た。

『何處にお前は居たかっ』とデイトヴが云つた。

『自分は火事を見て、小丘の上に居た。』

『何故お前は早く歸つて來て、火を消さなかつたか。』

『自分はとても奇蹟をやることは出來ぬ、若し自分が唾でも吐き掛けたら、火が消えると思ひなさるかね。』

オルガアの眼は泣いて赤くなつて居た、彼女は煤烟のために眞黒くなつて居たので、その容姿は思はず自分を笑はした。

『お前は餘程働いたかね。』と自分は尋ねた。

彼女の答は只涙であつた。

デイトヴは不機嫌らしく云つた。

『どうしたらばいゝか俺には解らぬ。』

『家屋の再築に着手しなければなりませぬ。』と自分は答へた。

自分は非常に大膽な氣持になつて、直にでも棟梁を曳きずつて來て其所に家を再築したいと思つた。假令自分が神の意志と戰ふことが出來ないにしても、神が自分に反對するか否かを見ようと思つた。

掠奪手段が新に始まつた。凡そ奸計詭計の方法にして自分の工夫しないものはなか

つた、昔し自分は祈禱をして徹夜したことがあつた、然し今自分は何うしたら他人の金子を自分の懐中に取入れることが出來るかと、終夜眠らずに考へるやうになつた。自分の頭腦は全然こんなやうな考で占領されて了つて、他のことは何にも這入ることが出來なかつた——勿論多くの涙が自分によつて流され、自分が多くの飢えた口から最後の一腕を攫み取り、多分自分の貪慾から小さな子供等が餓死したらうと云ふことも知つて居た。自分がその頃の貪慾さ加減に考へ及ぶと、嫌な氣持になつて來る。それでも自分は自らの愚を笑ふことが出來た。

聖徒等は以前のやうに親切と同情との眼で自分を眺めないやうになつた。然しオルガアの父と同じく自分の運動を探偵してゐるやうであつた。或る場合には自分は執達吏の役所から半留を盜みとる程に墮落して了つた。

一日、自分にある不思議な出來事が起つた。オルガアが遣つて來て輕く自分の肩に手を置いて云つた。

『マトヴさん、私は神明に誓つて、あなたを全世界の何者よりも愛します。』

彼女はこの光明ある言葉を、さも小兒でも愛撫するかのやうな、やさしい調子で云つた。古傳說中にある英雄のやうに、自分は元氣を回復したやうな感じがした。その時から、オルガアは自分に此上もなく貴いものになつた。彼女が自分を愛すると語つたのはこれが最初であつた、そこで自分は初めて眞情罩めて彼女に接吻して抱きついた。そのため二人の心は一つになり、自分は以前熱心罩めて神に祈つた時のやうに自分の個性を忘れた。

自分達の家は十月の初めまでに落成した、それは丁度聖母の仲保の祭日であつた。其家は火痕のある寄せ集めの材木が用ゐられてあつて外觀はでたらしてゐた、それは結婚式が行はれるよりも長い以前のことではなかつた、その時自分の義父はひどく泥酔して、巧妙な戲談を云つた時、惡魔のやうに、相好を崩して笑つた。しかし義母は何も云はないで、自分等二人を見て涙を流しながら微笑んでゐた。

『おい〳〵、お前は何うして泣き崩れて居るんだ、俺共は理想の婿を得たんだ、正しい聖徒を。』とテイトヴが叫んだ。

お客は皆近所の貴人であつた、――教會の僧侶は勿論、その地方の長官、二人の理事、その他多くは高貴の人々であつた。村人は自分の家の窓の下に集り、サベルコも彼等の中にゐた、彼は年老つて居たが、その性質が快活なので人氣があつた。

自分は窓の側に坐つて、彼が六絃琴を彈ずるのに耳を傾けて居た、彼の鋭い音聲が自分の耳に入つた、彼は餘り大きな聲で、自分の名譽を傷けるやうな戯言を言はなかつたが、なほ自分は明に彼がこんなやうなことを歌ふのを聞いた。

『お前の分配を、貪り食へ、吸へ、呑め！

お前が泥酔するまで、樂め、飲め！』

丁度その時彼の嘲笑が自分の氣に入つた、然し自分は彼のことを考へて苦しむ時がなかつた、オルガアが自分の傍に來て叫いたから――

『酒宴はもうお仕舞になりました。』

こんな暴食豪飲を見るのは彼女に苦痛であつた、この光景は自分にさへ厭な感じであつた。それから自分等二人になつた時に、二人は泣きながら抱き合つて寢所に坐つた。お互に思掛けもなく早く戀を遂げることが出來た幸福に付て笑つたり泣いたりした。二人が寢入る前に既に夜が明けた、然し二人は接吻して將來の計畫を語り合つた、お互に顔を見ることが出來るやうに蠟燭に火を點けた。

『私共は皆さんが愛して呉れるやうに生活しませう、あなたと生活すのは私にはどんなに、嬉しいでせう。』

二人は云ふに云はれぬ幸福を感じて夢中になつた、自分は云つた――

『どんなに神さまが自分につらくお當りになつてもいい、オルガア！、若しお前が自分の如何なる過失にも涙を流して呉れさいすれば。』

彼女はかう答へた。

『私は貴郎の仰せなら、どんなことでも厭ひません、私は貴郎の母にも妹にもなつてあげますわ、ねえ、貴郎。』

六

オルガアと自分は樂しい夢のやうな生活をした。自分は事務所で終日自分の仕事をした。何も眼に入らなかつた、また何も見やうと思はなかつた。然し自分の家に急ぎ歸つて、彼女と一所に森や野原を散歩した。

自分は少年時代のことを想起した、自分は小鳥を捉へたものだ、その頃は萬事が結婚式の鐘の音響のやうに愉快に行つた。鳥籠が壁に懸けられ、小鳥が囀づてゐた。自分の柔しい妻も小鳥がすきになつた。自分が日沒に家に歸ると、何時も妻は山雀がどうしたとか、蠟嘴がどんな風に歌つたとか云ふやうなことを話した。

夜分に自分は彼女にミネイアやプロローグを讀んで聞かしたが、それよりかもつと

多く自分の少年時代の物語、ヒラリオンやサベルコの物語、彼等の讃美歌の歌ひ振りや、神に就ての話や、丁度二年前に死んだ愚かな年老つたヴラスイのことなどを話して聞かした。自分が知つてゐる丈けのことは皆な話した、——人間や、鳥や魚に關する自分の智識は、明かに餘程價値あるものであつた。

自分は一身の全幸福を言語や文章で言ひ表はすことが出來ぬ、加之、自分のやうに、極めて僅か許の快樂よりか知らないもの、それも眞の僅がの間よりか快樂と云ふことを味はなかつたものには、到底それを描くことが出來ぬ。

二人は連立つて教會に出席して、一隅に相並んで坐り一緒に禱つた。自分は神に讃美と感謝の祈禱を捧げたが、秘密な誇慢心がないではなかつた。自分は自からを幸福にする爲に、神の力を征服し、神の意志に反して神を强迫したやうな感じがした。神は自分に讓つた、それで自分は神を讃美するのだ。『神さま、よく働いて下さいました、あなたに適はしい正義を創りなされた。』

あゝ、何とした憐むべき異教徒だらう！

その冬が眞の幸福の一日のやうに平穩に過ぎ去つた。一日オルガァは彼女が母になりかけて居ることを自分に打明けた。我等二人には新しい喜悦であつた。義父は何にかぶつ〳〵と不平を溢してゐたが、義母はオルガァに柔しい同情を持つてゐるやうに見えた。

自分はどうかして獨立を得たいと考へ出し、自分を幸福にする爲に、ヒラリオンの遺口に從つて、蜜蜂を飼養することに決心した。又自分は菜園を計畫し、鳴禽を捕るために出掛けることに決心した、――それは誰にも少しの害にはならぬ仕事だ。

一日、テイトヴは非常に荒々しい調子で、自分に話しかけた。

『お前はどうやら、甘くなつたやうだ、直にすつぱくならぬやうに注意せんといかない、お前は來年の夏には父親になることを忘れたかね。』

自分はその當時考へて居たやうにその事實を彼に話したいと、長い間思つてゐた、そこで自分の心中を語つた。

『自分はやりたいと思つた丈けの多くの罪を犯した、罪惡に於てはあなたと同格になつた、それはあなたのご希望だ、然しあなたよりか惡くはなりたくないんです。』

『お前の云ふ意味が俺には呑み込めぬ』と彼は答へた『俺は只一年七十六留の歳入では充分一家の維持が出來ないことを說明したのみだ。そして俺はお前に娘の持參金を浪費させたくないんだ。お前の奸智は俺に對する惡意としか思はれぬ、明かに俺はお前よりか利口だから。然しそれは俺にもお前にも利益にはならぬ、誰でもまだ地獄の火で燒き盡されないものは聖徒と云ふことが出來る。』

自分は彼をうんと云ふ程、撲りつけてやりたくなつた。自分の手の動くのを制へることは難しかつたが、オルガァの爲にやつとのことで忍んだ。

自分と義父との折合ひがよくないと云ふことは、村中一般の評判であつたので、村人は自分に親切に見えた、幸福な境遇は自分の性質を改善し、オルガァも仁慈深かつ

た。自分は百姓を助けたり、怨したりしてやつたから、村人の間にだん〳〵人氣を回復し始めた。

一村は丁度硝子製造所のやうだ、注意をしなければ手を動かすことも出來ない。テイトヴがこんなことを云ふやうになつたのも止むことを得なかつた。

『お前は今一度神に取り入らうと思ふのか。』

自分は一身の幸福のために、事務所を辭したいと決心し、そのことを自分の妻に話した。

『一ケ月に六留！　小鳥を捕つても、もう少しは儲かる。』

自分の妻はそれを好まなかつた。

『乞食にさへならなければ、あなたの好きなやうになさいましな。私は父が可憐さうに思ひますの、父は貴郎に好意を持ち、私共二人の爲に多くの大罪を犯しました。』

『あゝ自分は義父の親切を受けなくてもやつて行ける。』と自分は考へた。その翌日自分は義父に管理所を止すことを話した。

『お前は兵隊に行きたいんだな。』

自分は湯傷でもしたかのやうに彼の前に屹立つた。自分は直に、彼が自分に意趣返しをなし得ることを悟つた——彼には無數の知人があつたから難しいことではなかつた。若し自分が軍隊に拔擢されたなら、自分はきつと、やつつけられるに定つてゐる。義父は彼の娘のことを思つて自分を怨すやうな性質の人間ではなかつた。

係蹄は自分の首の周圍に段々固く引き締められてあつた。自分の妻は隱で泣いて、眼を赤くして居た。

『オルガア、お前は何を苦んでゐるか。』

『私は何だかいゝ氣持がしないんですの。』と彼女は答へた。

自分は妻に對する誓を想起して氣がとがめ、心がくしや〳〵になつて了つた。自分は堅い決心を持つて戰つたが、妻には氣毒であつた。自分はオルガアが居なかつたら

兵隊に行つてテイトヴとの關係を斷ちたいと思つた。

六月の末頃、二人の間に息子が生れた、それでまた自分は長い間、氣拔けがして茫然して居た、非常な難產であつた。オルガァは聲を揚げて叫び、彼女に對する自分の心配は胸も千切るばかりであつた。テイトヴは顏面をして、頭を垂れ、兩手を顫はし、獨言きながら、例の別莊の階段に恁れながら起つてゐた。

『彼女は死ぬだらう、……その場合に俺の全生涯は駄目になつて了ふ、……おゝ神よ恩惠を垂れさせ玉へ、マトヴー、お前が子供を持てば、俺の悲哀と生活を理解することが出來て、他人の罪惡を非難しなくなる……』

自分はその瞬間、眞實に彼の爲に悲しんだ、自分は大きな邸宅をぐるりと廻りながら考へた。

『神さま、また、あなたは私を脅迫し玉ふ。あなたの手は私の上にある、あなたは私の生活を改め、正しき道を見出すやうに私に時を與へて下さらなければならぬ、何故

あなたは恩惠を與へることを吝み玉ふか、凡てあなたの力はあなたの仁惠によつて貴いのであります。』

自分は此等の語を想ひ起すごとに、自分の愚を恥づる。子供が生れてから、自分の妻は變つて來た、彼女の聲が確乎とし、頭を眞直にするやうになつた。自分と相對して居る時でも、目立つ程變化があつた。彼女は自分の食べるパンまで數へた、彼女は全く卑しくはならなかつたが、それでも以前よりは貧乏人に恩惠を施すことが稀になり、自分に負債のある百姓に就て何時も自分に注意を促した。よしそれが只僅か許りの金子であつても、自分に氣を附けるやうにして居たらしい、最初、自分はそれを一時の氣狂れと考へた、當時自分は小鳥の商賣をして居るので、一ケ月に二回、町に鳥籠を持ち出し、その度毎に五留か、それ以上の金子を持ち歸つた。その外に一頭の牡牛と十二羽の鷄を飼つて居た、これで吾々に何の不足もない筈だ。

然しオルガァの眼には、確に不愉快な色が現はれて居た、自分が町からお土產を買

つて來てやると、彼女は多いと云うて何時も自分を責めた。

『それが何になりますか、お金にして置いた方が餘程いゝんぢやありませんか。』

自分は氣がむしやくしやして來た、慰安のため、平常よりももつと捕鳥に熱中した。自分は森に行つて網や係締をかけ、それから地面に横はり、靜に口笛を吹きながら種々と考へた。自分は心中に平安を覺え、何物をも求めなかつた。たつた一つの思想が起り、自分の心に觸れ、湖水に沈んだ石のやうに、不知界に消え去つて了つた。その渦が自分の最奥の實在によりて戰き慄へた。それが神に對する思想であつた。

その頃、自分は光り輝く天空に、秋の黃金色の外衣を着て、輝く森に、銀色の冬の外衣を被へる森の中に、神を見た。川に、野原に、山丘に、森林に、星に、花に、到る處に自分は神を見た。自分には何もかも皆聖く見えた。人間のことに就て考へる時に、自分の心は塒に驚いた鳥のやうに戰慄した。自分は嚴肅な心配と疑惑を以て靜かに人生を瞑想した。神の美と人間の隱鬱にして悲慘な生活とは調和し難いやうに自分に映

じた。光榮ある神は遙に遠く、その尊嚴と威力の中に坐を占めて居る、然し人間は悲慘と必要との爲に群を作つて集つて居る。何故、神の子、人間は心配と飢餓の餌食であるか、何故に人間は屈辱を忍び、泥中の蟲のやうに地土に壓潰されてゐなければならないか。ど、どうして神はそんなことを默許して居るか、神は自ら創つたものが卑しめられるのを見て何うして喜ぶことが出來るか、神を見て、彼の美を認める人間が何處に居るか、人間の心靈は人生の暗黑な悲慘によつて蔽はれて居る、滿腹は喜悅に、財貨は幸福に變る。人間は罪を犯すの自由を望み、罪から脫するの自由を求めることが至つて稀である。何處に人間の中に神の愛の力があるか、何處に神がありつまり、何處に神聖なものがあるか。

突然あらゆるものを破壞、困窮せしむる豫覺、——朦朧した兆候が自分の心に起つた。自分の心は冬の土地のやうに冷くなつた。その時に自分は言語にそんな思想を云ひ表はさうとしなかつた。然しそれが言葉に表はされないで、自分の眼前に現れた時、

自分はその力を感じ丁度黒い大鴉の前にある子供のやうに、それに驚かされた——自分は飛び上り、鳥捕器械を持つて家に急いだ。自分は恐怖の念を薄らぐために歌つた。

百姓どもは自分にからかひ始めた、その地方ではこの小鳥捕りの仕事は卑しめられてあつたから。オルガアは度々深い吐息を洩した、彼女も非難した、義父は自分を責めたが、自分は何も答へず、秋の來るのを待つて居た。自分は多分兵役を免れて、その奈落の苦痛を避け得るものと思つた。

オルガアはまた懐姙をして深い陰鬱に陥つた。

『お前はどうしたんだね。』と自分が言つた。

最初彼女は何んもでないと云つた、一日彼女は泣きながら、自分の首に倒れかゝつて云つた。

『今度の分娩で私は死にます、確にさう云ふ氣がしますの。』

自分は女と云ふものはそんなやうなことを度々話すのを知つて居たが、少からず驚

かされた。自分はオルガアを慰めやうとしたが、彼女は一向耳を傾けなかつた。

『それではまた一人法師におなりでせう！、貴方を愛するものがなくなつて了つて。貴方は非常に非社交的で冷酷であります、どうか子供の爲にあまり傲慢でないやうにお願します、私共は皆神さまの前には犯罪者で、神さまの眼には罪人であります……』

彼女は屢々こんなやうな方法で自分に話した。自分の心は彼女に對する哀憐と心配とで不安であつた。自分は義父と一種の休戰をした。彼は慣用手段によつて直にそれに就て充分な利益を占めた。彼は何時も『これに記名せよ』或は『それを書くな』と云つた。

非常に重大な事件が引き起つた、新兵の募集が行はれんとして居たことゝ、自分が二人の子供の父親とならうとして居たことであつた。

その村の新兵は亂暴をやり始めた、彼等は自分を誘ひ出した。然し自分は彼等と一所に出掛けることを拒んだので、彼等は自分の家の窓を打ち壞した。

自分の運命を定むる籤を抽く爲に町に行かなければならぬ時が來た。オルガアはその時でも自分が家を出るのを心配した。然し義父は自分と同道し、何れ丈け自分の爲に骨を折り、何れ程金を費つたか、何の位うまく萬事を處理したかを道すがら話した。

『多分それは骨折損だつたでせう！』と自分は云つた。そして籤を抽いて見ると、兵役を免れた、最初テイトヴは自分がそんなに幸運であつたことを信じないで、冷笑して云つた。

『神さまがお前に味方して居て下さるやうだ。』

自分は返答をしなかつたが、云ふに云はれない幸福を感じた、自分にとつて、それはあらゆる壓迫からの自由を意味するのであつた。自分が家に歸つた時、オルガアの喜悦は非常なものであつた。自分の最愛の女は泣いたり、笑つたり、讃めたり、自分が熊でも殺しかのやうに取りなして呉れた。

『神さま、忝けなく存じます、これで平安に死ぬことが出來ます。』と妻が云つた。

自分は彼女の恐怖心について揶揄つて見たが、然し自分は餘程心配して居た。彼女が自ら死ぬものと確く信じて居ると思つたから。——こんな不吉な信仰と云ふものは人間の活動力を破壞するものだ。

それから三日の後、彼女の陣痛が始まり、全二日間、彼女は恐るべき苦悶をし、三日目に死胎兒を分娩して死んで了つた。自分の最愛の妻は自分で今度は死ぬと思つて居たやうに死んで了つた。

葬式のことに就ては今記憶がない、長い間自分は盲目の啞のやうであつたから。

この狀態から自分を醒まして呉れたのは、テイトヴであつた。それはオルガアの墓畔であつた、——自分は今でも尙は自分の心の眼の中に、彼が自分の前に起つて、眞直に自分を見詰めて、こんなことを云ふのを見るのだ。

『さて、これは墓畔で二人が出會つた二回目だ、此處で二人は知合になつた、二人は此處で友情を新しくしようぢやないか。』

自分は雲の中からでも、墮落ちたやうに周圍を見廻はした。雨が降つて居た、葉のない樹が、その鷄冠を左右に動かしてゐた、墓上の十字架は周圍の霧のために見えなかつた。周圍の景色が霜や濃い濕氣で包まれ打ち壞されてあつた。自分の呼吸は雨や霧が眞の空氣をかくして了つたかのやうに止められてあつた。

「どんな用事ですか」と自分はティトヴに云つた。『どうか、彼方へ行つて、自分を平安にさして下さい。』

『少しは俺の悲痛を察して貰ひたいんだ、神さまは多方お前の爲に俺を罰し、俺が妨げてお前自身に適はしい生活をさゝないやうにした爲め、俺の最愛の娘を奪ひとつて了つたんだ。』

この自分の足は地中に埋れ、粘々した汚泥が自分の靴が堅くくつついて、何だか厭な音がした。

自分はティトヴを擊つて、彼が糠袋でもあるかのやうに、地上に投つけて怒鳴つた。

『自らを咒へ、この破落漢！』

當時自分は狂氣亂心の時期であつた、自分は丁度強い手で投げ倒され、どうすることも出來ないで大地に倒れたやうであつた。自分の心は苦悶に充され、自分の心靈は神に對して反抗して居た。若し自分が神聖な偶像を見たなら急いで隱れたに相違ない、爭論と喧嘩は、その當時の自分には後悔よりか寧ろ一種の趣味であつた。自分は謙遜な自白をなすことが正しくもあり適はしくもあることを知つて居る。

『神さま、あなたの手は重いが正しい、あなたの憤怒は利益にはなるが大きい。』

然し自分はこんなことを善い意味で云ふことは出來なかつた。自分は自ら處するの道を發見することが出來ないで思想の混亂を來してゐた。

『多分、私があなたの存在を疑つて居たから、こんな苦痛を與へられたのでせう？』

この思想が自分に恐怖を抱かしめ、自分自身を辨明することを求めた。

『私の疑つてゐたのはあなたの存在でなく、あなたの恩恵についてゞあつた。それは私には人類にあなたの救助と指導がないやうに見えたからであります。』

自分の頭腦に閃き燃えたものはこの思想で、その爲に苦悶しのたであつた。自分は眠ることも何をすることも出來なかつた。夜になると、自分は怪しい陰法師で息を止められたやうに感じた、オルガァは自分に現はれた。非常に苦痛のため自分は最早や生活の力が殘されてなかつた。

その時自分は首をくゝつて死なうと決心した。

一夜、自分は寢卷を着て床の上に身體を投げかけて横になつてゐた。自分の可憐な妻が幼兒になつて現はれた、彼女の青い眼が輝き自分を呼んで居た。月の光は窓から射し込み、床の上に反射して愈々自分の心を憂鬱にした。自分は飛び上つて鳥捕網の綱を捉へ、桷に釘を打ち込み輪索を作り右手に椅子を置いた。自分が外衣を脫ぎ、襯衣のカラーを引き裂いた時、直に壁の上に小さな怪しげな、ぼんやりした顏が現はれて居るのを見た、それは自分の顏がオルガァの鏡面に反映したのであることを認めた時、恐怖して絶叫せんとした。頭髮は亂れ、頰は凹み、鼻は凋み、口は呼吸に苦んで居るかのやうに半ば開いて居るので、全で自分は狂人のやうな相貌を呈して居た。自分の眼は深い激しい苛責に充ちた煩悶を以て熟視して居た。

自分はこの人間らしい優しい相貌の失せたことを悲しみ、腰掛の上に坐り怪我をした子供のやうに泣いた。然し泣いて涙を充分流した後になつて、その網は自分に滑稽なもの、自分を嘲笑するものゝやうに見えた。自分は憤つてその網を引き裂き、室の片隅に抛り投げた。死は只新しい謎だ、そこで自分はその時人生の謎を解釋しようとして居た。

自分は何をしなければならなかつたか、二日は既に過ぎ去つた。自分の求むる所のものは平和であつたことを知つた、自分は厭でも悔罪をしなければならぬと考へて歯を喰ひ締めた、そこで自分は坊主の所に行つた。

或る日曜の日没に、自分は坊主を訪ねた。その時坊主は梵妻と一所に坐つて茶を喫んでゐた。彼等二人は四人の子供に取り圍かれてゐた。坊主の黒い顔には鱗片のやうな汗玉が輝いて居た。

『坐つてお茶でも喫みなさい。』と彼は馴々しく云つた。

その室は温かで明かるかつた、それに其處にあるものは皆奇麗できちんとしてあつた、自分はこの坊主が教會の禮拜を司る時の不眞面目な態度を想ひ起して、獨りで考へた。

『こゝは確に彼の教會だ。』

自分は餘り謙遜な態度でなかつた。

『まあ、マトヴさんも細君が亡くなつて不運だね。』

『はい、まことに不仕合です。』と自分は云つた。

『全くさう？　ではお前さんは四十日間彼女のために禱らなければなりませぬ、彼女

が夢の中に現はれますか。』

『はあ。』と自分は答へた。

『では、お前さんは必ずこんなやうな祈禱をさゝなければならぬ。』

自分は一言も語らなかつた、梵妻の居る所で、語ることが出來なかつた。自分はとり分け引き締りのない顏の、ぶよ〳〵に肥つてよろ〳〵して居るこの大きな女を好かなかつた、彼女は高利の金を貸して居た。

『彼女の爲に熱心に禱りなさい、』とは坊主が自分に與へた忠告であつた、『悲んではいかぬ、悲しむのは神さまの意に背くことになる。神さまは自ら爲し給ふことを能く知り玉ふのだ。』

その時自分は云つた。

『神さまは實際によく知り玉ふのでありますか。』

『それは確かだ、あゝあゝ』と彼は云つた『私はお前さんが他人に對して傲慢無禮な

ことをよく知つて居る、然し神さまの御意に反抗して傲慢無禮な態度に出るやうなことをしないやうになさい。その場合にお前さんの受くる懲罰は百倍も二百倍も重くなるから。これは全くヒラリオンの不義罪惡の遺物が、お前さんの心中に働いて居るのではあるまいか、彼の男は酒の爲めに有害な邪教に陷つて了つた、お前さんも忘れてはなりません。』

梵妻が横合から話に口を入れた。

『彼のヒラリオンは本來から云ふと、僧院に監禁されなさればならぬ、然し私の夫はこの通り非常に親切に取計らひ、彼に對して訴訟手續をしませんでしたの。』

『それは間違つてる』と自分は云つた『彼はお前さんの夫のことについて不平を云つた、然し邪教に對してゞはない、只お前さんの夫の義務の怠慢について不平を言つた、その點に於てお前さんの夫は譴責を受けなければならん。』

吾々の間には激烈な毒々しい議論が始まつた。最初に坊主は無禮であると云つて自分を責め、いろ〳〵な例證を揚げ、彼は自分に對する憤怒に於て此等を牽強附會して說明した。その時彼等二人——坊主と梵妻——とは自分を罵詈讒謗し始めた。

『お前とお前の義父は好一對の盜賊だ』と彼等は叫んだ、『お前達は敎會のものを盜み奪つた、古からモクリドルの枯草は敎會の所有であつた。然しお前達は私等を欺いてそれを奪ひ取つた、それは確に神さまがお前を罰し玉ふた理由だ。』

『確にさうだ、』自分は云つた『モクリドルは不正な手段でお前さんから盜んだのだ。』

然しお前はそれを百姓どもから盜んだのだ。』

自分はもう歸らうと思つて起ち上つた。

『お待なさい、四十日間の祈禱の料金は？』と坊主が云つた。

『そんなものは必要がない。』と自分は云つた。

自分は彼の家を去る時考へた。

『マトヴ、お前は自分自身の靈魂のために、立派な慰安を見付けた。』

それから三日經つて、自分の愛兒サスチヤは砒素を砂糖と間違へて舐めて死んだ。この兒の死は自分に何等の影響もなかつた、自分は冷淡になり、萬事につけて無頓着になつた。

七

その頃自分は一人の高僧が住つて居る町に行かうと決心した、その僧正は敬虔な學問のある人で、正統派信仰の敎義に關して反對者と議論することが好きで、正確な判斷力を有つて居ると云ふ評判が高かつた。自分はその地を去ることを義父に語り、若し彼が百留を呉れるなら、自分の所有地及び所持物一切を彼に讓つてもよいと云つた。『いえ、』と彼は云つた『その相談は別問題だ、然し俺は六ケ月期限の三百留の手形で百留をお前に貸さう。』

自分は手形に裏書をし、旅行券を受けて出發した、自分は心の動搖を靜めるために考へながら大概は徒歩で旅行した。自分は懺悔する目的で出掛けたが、然し自分は神にについて考へて居なかつた。然し、それは半ば自分自身のことについて考へることを恐れ、又半ば自分が神の憤怒を受けて居たからであつた。自分のあらゆる思想は混亂の極度に達し、ぼろ〳〵の衣類のやうに片々になり、自分の天地は暗く搔き曇つた。

自分は僧正に面會しようとして大分骨を折つた。最初自分は面會を拒絶された。訪問客に應對する好人物らしい下男が四回まで自分を追ひ歸した。

『私は大僧正の書記だ、私に三留呉れたら、面會さしてやらう。』

『只の三コペックだつてやるものか。』

『ではお前を上げてやらぬ。』

『それでは、宜しい。無理に這入つて行かう！』

彼は自分が彼に讓らないと決心したのを見た。

『では這入つていゝ、今のは眞の戲談だよ、お前は面白い奴だ。』

彼は自分を一小室に案内した、その室の隅に、痩せた澁面をした、灰色な頭髪の小男が安樂椅子に坐つて居た。

『この人なら自分に何か敎へて呉れるに相違ない。』と自分は考へた。

『お前は何の用事があるか。』と彼が云つた。

『敎父、私の心靈は非常な苦悶を受けて居ます。その時自分の側に起つて居た例の書記が叫いた。

『お前さんは大僧正と云はなければならぬ。』

『どうぞ、召使を彼方にやつて頂きたい。召使の前でお話するのは迷惑でありますから。』

高僧は自分を見て、彼の唇を噛んで云つた。

『アレキシス、彼方に出て行け、さあ、お前さんの思ふことをお話しなさい。』

『自分は神さまの恩惠について疑惑を抱いて居るのであります。』と自分は云つた。

彼は額に手をあて、暫く自分を見て、音樂的な音聲で呟いた。

『なあに、お前はなんと云つた、オ、馬鹿者奴！』

自分は何も怒られる理由がない、多分それは別に不親切の意味はなかつたかも知れなかつた。吾々社會の先輩は活動的な惡事よりも、習慣とか愚昧とか云ふことのために一層多く吾々を輕侮する風がある。

自分は云つた。

『大僧正さま、どうか自分の云ふことをよくお聞き下さる譯には行きますまいか。』

自分が丁度椅子に坐らうとした時、老人が彼の手を動かして叫んだ。

『起て！　起て！　お前は私に禮拜をしなければならぬ、この不分明漢奴！』

『何故、あなたに禮拜するのでありますか、』と自分は云つた『自分が若し罪人である』としても、それはあなたに對してゝはなく、神に對してゝあります。』

彼は愈々怒つた。

『では、私はお前に對して何人か、又私は神に對して何人か。』

自分はこんな瑣細なことで、彼と議論することを恥かしく思つたから、彼の前に跪いた、彼は自分を威嚇するやうに一指を向けて云つた。

自分は最早や彼と語るべき希望を有つて居なかつた。然しその感情が全然消え去らぬ前に、自分は全く彼の面前と云ふことを覺らないで話し始めた。初めて、自分は自分の思想を言語に表はした、それに驚かされた。

突然自分は老人が叫ぶのを聞いた。

『默れ、この惡漢！』

自分は急ぎ走つて壁に衝突つたやうに感じた、彼は自分の上に立つて、彼の指を振はしながら呟いた。

『お前は自分で何を云つてるか解らないか、この氣狂の馬鹿者奴！　お前は自分の罪惡を感ずることが出來ないのか、この惡漢奴！　虛言者の異敎徒奴！　お前は罪惡を懺悔する爲に此處に來たのではなく、惡魔の間諜として私を誘惑する爲に來たのだ。』

自分は彼の容貌に描かれた恐怖——憤怒でなく——を見た、彼は戰へて居た。彼の髯と自分の方に擴げた手は震へて居た。

自分も同樣に驚かされてあつた。

『僧正、あなたは何のことをお話になりますか、私はそれでも神さまの存在だけは信じて居ます。』

『虛言を吐くな、こん畜生奴！』

彼は神の忿怒と復讐とを說いて自分を脅し、柔しい聲でもつて靜に話した。着てゐる法衣が綠色の水波になつて彼の周圍に流れるかのやうに、全身を震はしながら話した。彼が自分の心に描かしめた神は殘忍な威嚇的な、不機嫌な陰鬱な顏容で、愛憐に乏しく昔のエホバの神と同じやうに嚴肅であつた。

その時、自分は大僧正に云つた。

『さて、異端に陷つたのは却てあなたではありますまいか、あなたの神は基督敎の神でありますか、何處にあなたは基督を隱しましたか、何故、あなたは他人の眼前に伴侶となり擁護者とならないで、苛酷なる判斷者となりますか。』

彼は自分の髮を捕へ、ゆすぶつて、咽びながら私語いた。

『お前は全體何ものだ、この惡漢奴！　私はお前を警察官に引き渡し、牢獄に打ち込み、僧院に入れ、西比利亞に送つてやる！』

その時自分にはこんな思想が起つた、人間が自分の信ずる神を保護せんが爲に、警察官を呼ぶやうでは、その人もその信ずる神も共に、多くの力も少しの美も有たないのは明かだ。

自分は起ち上つて云つた。

『どうか、もう行かして下さい。』

老人は彼の手を弛め、喘ぐやうな呼吸をして叫んだ。

『お前はどうする積か。』

『自分はもう行きたいんです』と自分は云つた。『自分はあなたから何も學ぶことは出來ぬ、あなたの言葉は死んでゐる、あなたはまた言葉で神を殺してゐます。』

今一度彼は警察官のことを話し出したが、自分は少しもそれに注意しなかつた。警官も僧正がやつたよりかもつと、惡く自分を取扱ふことはとても出來なかつた。

『天使は――警官でなく――神の光榮を看守する、然し若しあなたの信仰が他の方法をあなたに敎へるなら、そのやうに勝手にしなさい。』

彼は鉛色の顏容をして自分の方に突き進んだ。

『アレキシス！』と彼が云つた。『この男を抛り出せ。』

すると、アレキシスは驚くべき熱心を以て自分を街道に無理無體に押し出した。

それは日沒であつた、自分は僧正との對話に全二時間を費した。街道は既に眞暗で非常に陰鬱な光景であつた。何處も彼處も人が群り集つて笑つたり、呪詛けたりして

あた。丁度基督出現祭の日であつた、自分は悠々と歩き廻り、人々の顔を見詰め、疳癪が起つてこんなことが言ひたくなつた。

『馬鹿野郎達奴！　貴様達は全體何が幸福だ、貴様達の神はもう打毀されて了つた、やい、ちつと自分達の爲に氣をつけるがいゝ。』

自分は疳癪玉が募つて、泥酔者のやうに、何處へ向けて行くか知らないでうろつき廻つた。自分は旅宿に歸らうと思はなかつた、其處では飲むことゝ喧嘩口論の外には何もなかつた。自分は大分遠い郊外に向つて行つた、其處には小さな別莊があつて、野原の方に面して黄色の窓に眞直に雪を吹きつけて、それを埋めやうとしてゐた。自分は一杯飲まうと思つた。——可なり飲んだ、然したつた一人で愉快な伴侶もなく飲んだ、自分は見ず知らずの他人の中に一人法師であつた。凡て外の人々の眼には犯罪嫌疑者であつた。

『あゝ、この野原を一直線に突き切つて行つたら、何處に行くだらう？』と自分は考へた。

突然に身輕な衣裝をした女が、寒氣を防ぐために、只ショールを掛けた許りで、戸口から突き出て、自分を見て云つた。

『あなたのお名前は？』

自分は彼女を賣卜者と思つた。

『自分は姓名をお前さんに云ひたくない、自分は不幸な人間だ。』

『不幸ですつて？』彼女は笑つて叫んだ。

『どうして、祭日に？』

彼女の陽氣な調子が自分を苦しめた。

『此處邊に旅宿はないかね。』と自分は云つた。『自分は暫く休んで温まりたいと思ふが、どうも非常な寒氣だ！』

彼女は近寄つて、自分をよく凝視め、親切な調子で言つた。

『あの下に行けば旅宿はありますが、若しお厭でさへなければ、私の家へお出なさい、お茶でも喫げませう！』

自分はそれについて餘り多く考へないで、受動的に彼女に從いて行つた。自分は直に彼女の室に這入つた、その室の一隅に洋燈が神聖な偶像の下の壁に燈つて居た。骨格の逞しい老婦が其處で何か噛みながら坐つて居た、卓子の上には茶甌があつた、何も彼も温かさうで、氣持がよかつた。例の女は坐るやうに自分をさし招いた、彼女はまだ年が若く、バラ色の頬で、胸部が廣かつた。老婦は彼女の蔭から、自分を吟味し、鼻をならして居た。彼女の風雨に惱まされた大きな顔容は一見して眼がないやうであつた、自分は不安な氣持になつた。何故自分はこんな所に來たか、この女達は全體何ものだらうかと考へた。

自分はこの若い女に尋ねた。

『お前さん達の職業は何にかね。』

『私共はレースを製造して居ますの！』

それは事實らしかつた、絲卷が壁の棚から群がり吊つてゐたから。

突然彼女は自分の顔を熟々と見詰めて、ずう〳〵しく笑つた。

『それから……私は折々この附近を少しづゝ散歩しますの！』

老婦は無作法に笑つた。

『おゝ、タティアナ、お前もお轉婆ものね。』

若し老婦がこれを云はなかつたなら、自分はタティアナの云つたことを理解することが出來なかつたらう。さて自分は彼女の云つた意味を知つて大に困つた。これは自分がこの種類の女と接觸するやうになつた最初であつた。而して自然に自分はこんな女を惡く考へた。

タティアナは笑つた。

『ご覽よ、ペトロヴナ、あの方が赤くなつたのよ。』

自分は不快な感じを有つた、自分はひどい仲間に這入つた、前非を悔ゆる懺悔から直に致命の大罪に陥つた。

『お前はそんなことを誇ることが出來るか。』と自分が云ふと、彼女は大膽に答へた。

『私はそれを誇りとして居ますの！』

老婦は再び鼻息を荒くしだした。

『えーい、タティアナ！』

自分は彼等から逃げるのには何と云つていゝか、どうしていゝか分らなかつた。自分は當惑の極、一言も云はないで坐つて居た。風が吹いて窓を動かして居た。茶缶の湯が沸り、タティアナは自分を誘惑するやうにつとめた。

『馬鹿に私は暑いのよ！』と彼女は云つてずやケットの前面を脱づした。彼女の顔容は奇麗で、その眼はそんな大膽なことを云ふにも係らず、自分を引きつけた。老婦は卓上に燒酎と果實を列べた。

『さて、一杯丈け飲んでお金をやつて行かう。』と自分は考へた。

『どうして、あなたはそんなに不幸なんですの？』とタティアナが突然に尋ねた。

自分は事實を打明けない譯に行かなかつた。

『自分は妻を亡くしたんだ。』

『何時お亡くなつて？』とタティアナは非常にやさしい聲で云つた。

『丁度五週間程前に。』

彼女は着物を釦で留め、大層眞面目な容姿をしたので、大に自分の心を喜ばした。自分は彼女を凝視て優しく私語いた『ありがたう！』自分の心は悲んで居るが、自分はまだ若い、結婚生活の二年來、女性の愛の必要を感じた。

老婦は帥くやうに云つた。

『ではお嫁さんが亡くなつたんだね、何も其をそんなにくよくよするには當らないわね、お前さんはまだ若いし、女に縁はあるわね、女に旱魃はありませんさ。』

タティアナは荒々しく云つた。

『お休みな、ペトロヴナ、私はお客さまを充分お世話してよ。』

老婦が去つた時、タティアナは親切に而も眞面目な調子で云つた。

『あなたは親戚がおありになるの。』

『一人もない。』

『お友達は？』

『友達もない。』

『あなたどうしやうと思つて居らしつて！』

『自分には分らない。』

彼女は暫らく默つて考へて云つた。

『私の云ふことをお聽きなさい、あなたは失望の狀態であるらしい、私はあなたが獨りでさまよひ歩かないやうに忠告します、あなたは私がたつた一度招いたばかりで、

私の家に來られた、そんなことでは直ぐに零落して了ひますよ、あなたは此處で今晩一夜お泊りなさいな。さあ寢床があるから、彼處に行つて神を讃美してお休みなさい、あなたが私共の厚遇を受けたくなければそれは自由ですの、あなたが適當と思ふ丈け、ペトロヴナにやつて下さればいゝの、若し私が邪魔なら、さう云ひなさい、私は何處へでも外の室に行きますから。』

彼女の言葉、特に眼の表情がひどく、自分を喜ばした。自分は喜悅の感情を表さない譯には行かなかつた。自分は笑ひながら云つた。

『あゝ、あの高僧！』

『何の高僧！』タティアナは驚いて尋ねた、自分は說明に困つた。

『それは私の口癖だ、何と云ふ精確な意味はないが、折々自分は夢に高僧を見る。』

『ではもうお休みなさい！』と彼女は云つた。

『まだ行つて呉れるな、若しお前さんが心おくことがなければ暫時ゐてお呉れ。』と自

分は急いで叫んだ。

彼女は又坐つて笑つた。

『私はさうするのが非常にうれしいんですわ、どうして心おくことがありませう?』

彼女は茶か燒酎を飲むやうにすゝめ、自分に何も食べたくないかと尋ねた、彼女の變らぬ親切に絆され、自分の眼には涙が浮んだ、自分の心は春の曉の日出に於ける鳥のやうに嬉しかつた。

『突然に尋ねて失禮だが、先頃お前さんが自分に話したことは實際か、それとも自分にからかつてゐるんか、眞實の所が知りたいのだ。』

彼女は眉を顰めて答へた。

『はあ、私はそんな種類の女なの、……あなたは何故こんなことを尋ねますか。』

『さう云ふ種類の女に出會つたのは初めだ、自分はそれで苦んで居る。』

『どうして、またそんなことをお苦しみなさるの?』

彼女は非常に柔しく、怒らないで笑つた。

『お前さんのためでなく、然し自分のため、自分の愚鈍なためだ。』

自分は打解けてこの町の女に關する自分の意見を話した。彼女は靜に注意を拂つて耳を傾けて居た。

『私共の中にはいろんな女が居ますの』と彼女は云つた。『多分その中のあるものは、あなたが考へて居るよりか、もつと惡い、あなたは餘り輕々しく他人の云ふことを信じ過ぎるやうに思はれます。』

自分はこんな女が賣笑婦であると云ふことを考へることが出來なかつた。そこで自分は彼女にこんなことを尋ねた。

『必要のためにそんなことをするかね。』

『私は最初若い男に誑されましたの、それで彼の男を苦めるために他の男を捕へた、それで今日まで繼けてゐますの……折々、私はパンのために其をしなければならぬや

うに思ひますの。』

彼女はこれを至極簡單に述べて、少しも後悔して居るやうな態度は見えなかつた。

『お前さん、會堂に行くの？』と自分が尋ねた。

彼女もこの質問には驚かされ、烈しく赤面した。

『會堂に行くことは誰にも禁ぜられてはないわ。』急いで附加した。

自分は彼女の感情を害したと思つたから、自分は彼女の福音を知つて居る、自分

『お前さんは自分の云つたことを誤解したんだ、自分は神の罪ある女、マリイ・マグタレンの

は法利賽人が我が救主基督を試みるために連れ來つた罪ある女、マリイ・マグタレンの

ことについてはよく知つて居る。只お前は自分の生活のために神に對して不平はない

か、また神の恩惠を疑はないかと云ふことを尋ねたいと思つたのだ。』

彼女は眉を顰めて暫らく默つて考へてゐたが、やがて叫んだ。

『神さまはそんなことに關係がないやうに思はれますが。』

『それはどうしてか、神は我々の父であり牧者ではないか。人類の運命は神の全能の

力に支配されるものでなからうか。』

『私は誰にも少しの害もしない、それで私は譴責されなければなりますまいか、若し

私が不潔な生活をしたとて、自分以外、誰に害をするのですか。』

自分は彼女が善とか正直とか云ふやうなことを云ふ積りであるのに氣がついたが、

然し自分は彼女の云ふことを理解し得なかつた。

『私は自分の罪惡の責任を存してゐます』と彼女は無作法に微笑んで、自分に凭れかゝ

つてかう云つた。』その上私の罪惡はそれ程極惡のものゝやうに思はれません。恐らく

は私が云ふことは正しくないかも知れないが、然し私があなたに話すことは眞實なの。

私は教會に行くことが好なんです、私共の教會堂は長い以前に建築されましたの、そ

れは今も非常に燦爛なもので、奇麗で、唱歌隊は餘程上手に歌ひますの、往々その歌

はひどく私を感激さして涙を流すことがありますの、會堂に居る間、私共は各自自分

の苦痛を忘れることが出來ます。』

彼女は暫く默つて、それから附けたした。

『それから今一つ理由があります、それは男子達が私をよくぎろぎろ見ますの。』

自分はこれに驚かされて、蜂谷から肝が流れた、自分は彼女がどうしてそんなやうなことに調子を合はして行くことが出來たかに就て迷はされてゐた。

『あなたは細君さんをよく可愛がりなすつたの？』と彼女は尋ねた。

『さう、餘程可愛がつてやつた。』と自分は答へた。この單純な質問は何よりも自分を喜ばした。

その時自分は精神上の苦痛、罪惡に陷らぬやうに神が自分を充分保護しなかつたこと、その後オルガアを死なして不正にも自分を罰したことにつき、神に對する怨恨を彼女に物語り始めた、彼女は最初青くなつてふさぎ込んだ、それから彼女の頰は深紅になつて輝き、眼は閃いて自分の心を刺戟した。

自分は臍の緒切つて以來、初めて自分の經驗の及ぶ限り、人間のあらゆる範圍に、自分の思想を回らして見た。それが何だか自分には不調和な、痙攣るやうな、泥土にまみれたやうなものに見えた、そしてその惡業と無力、その悲哀と呻吟、叫聲の爲に何だかどうも恥かしいやうな氣がした。

『何處にお前さんは神聖なものを見るか』と自分は云つた。『人間は一所に群り集つてお互に血を吸ひ合つて居る、到る處にパンの外皮の爲に非道な爭論をして居る、その間に何が神聖であるか、何處に善と愛、力と美があるか、自分はまだ若いが盲目に生れなかつた、何處に基督即ち神の子は居るか、誰が神の淸淨な心によりて蒔かれた花を踏みつけたか、誰が神の愛の智惠を盜み奪つたか。』

自分はどれ位に、彼の僧正が神の復讐を說いて、自分を脅かしたか、僧正が彼の神を保護する爲に警官を呼ばうとしたかを彼女に物語つた。タティアナは笑つた。自分には彼の僧正がちゆ〳〵云つて飛び廻つて居る時、なによりも大きな綠色の蝗蟲に一

番よく似て見えるので滑稽に感じた。この蝗坊主はその議論の眞理に實際の信仰を持たない癖に、何か當面の重大事件でもあるかのやうにしてゐた。

彼女は自分が言ふことを聽いて笑つて、それから眞面目になつた。

『私にはそのことが皆なは分らないんですが、私は聞いて吃驚したの、あなたの神さまに就ての考は餘り大膽過ぎるぢやないの？』と彼女は云つた。

『誰も神を認めないで生活することは出來ないでせう。』と自分は答へた。

『さう、それは尤もです、然しお前さんは鐵拳を奮つて神さまと格闘でもやりかねさうに見えるのね、それでよいでせうか、あなたが浮世はつらいと云はれたのは尤もだわ、折々私なども何故浮世はこんなにまゝならぬものだらうかと迷ふことがあるの。さてあなたにお話したいことがあるから聞いて下さいな、此處から餘り遠からぬ所に修道院がある、其處に女修行者——餘程年老つた偉い尼僧が住つて居ますの、あなたは彼處に行つてあの高德な尼僧に相談して見たらよからうと思ひますわ。その尼僧さんは神さまのことを大層うまく話されます。』と彼女が云つた。

『きつと其處に行かう、自分は何處へでも行つて、あらゆる賢者と聖僧に相談して彼等の手によりて、心の平安を得たいんだ。』

『私はもう彼處に行つて休みますわ、貴方ももうお休みになつたらいゝでせう。』と云つて、彼女の手を自分にさし出した。

自分は彼女の手に接吻して、彼女の手を強く握り、自分の心の底から云つた。

『ありがたう、お前さんが自分に云つたことの眞否を知らぬから、今それを適當に評價することは出來ないが、お前さんは善良な女だと思ふ、自分は深く感謝する。』

『あなたは何をお仰せになりますか、どうか靜にお休みなさい。』と彼女は云つた。

『私は少しでもあなたの氣持がよくなつてうれしいわ。』と彼女は云つた。

自分は彼女が實際に喜んでゐるのに氣がついた。自分は彼女には何であるか、而し

て彼女は或る一人の人間に少し許りの慰安を與へた爲に喜んでゐた。

自分は洋燈を消して床に就いて考へた。

『それで自分は全く思ひ掛けもなく聖い祭日を守つた。』

自分の心はなほ重苦しかつたが、それでも何だか新しい善良なものが心の中に湧き出づるやうに感じた。自分は屢々挑發に充ちた、タディアナの眼を見た、又他の時には至極眞面目な眼で、女らしい柔和と云ふよりはもつと親切に語つてゐた。自分はそれを考へて喜んだ。ある人間に對してこんな親切な思想を持つことは餘裕のある氣分を維持することではなからうか。

自分は翌日彼女に寶石入りの金の指輪を買つてやらうと決心したが、然し不幸にも翌朝になつて自分は彼女に買つてやることを忘れて了つた。それからもう十三年經過した、今でも彼女を想出す時は、屹度彼女に指輪を與らなかつたことを殘念に思ふ。

翌日早朝彼女は自分の室の戸を叩いた。

『もうお起きなつたらいかがです！』

吾々二人は宛然舊知のやうであつた、一所に座つて茶を喫んだ、彼女は例の女行者の所に行くやうに說き勸め、自分にさうするやうに約束さした、親しい別れの挨拶を交はした後で、彼女は戸口まで自分を見送つた。

自分は草原の眞中にでも居たやうに、町の眞中に居て淋しく感じた、例の尼寺は町から八九里も隔つてゐた、自分は直に出發して翌日そこで朝の法會を聞いた。

尼僧の黒い一群が僧院の周圍を取捲いて居た、それは丁度山が粉碎されて、その黒い斷片が、この僧院の周圍に轉つて居るやうであつた。この尼寺には金があつて多數の尼僧が居た、その尼僧等が皆青白い弱々しい重苦しいやうな容貌で、宛然麵麭粉で捏ねあげたものゝやうに見えた。尼僧達は多少急ぎ氣味であつたが、熱心に祈禱文を

歌つてゐた。彼は美くしい低音で、身體も大きく肥つて居た。尼僧の唱歌隊は皆立派で神々しく歌つた。壇上の小蠟燭は白い涙を流し、その光は人類に對する慈愛で震へてゐた。

『我が靈魂は爾の宮殿、神の聖き宮殿に高く飛ぶ。』と若々しい聲で優しく歌つた。

習慣により、自分は讃美歌の文句を自分で繰返した、同時に吾軆は周圍を見廻はして、この祈禱して居る尼僧の中でどれがタディアナが云つた高德の尼僧だらうと物色して見た。自分の心は餘り敬虔の狀態ではなかつた、それが氣がつくと、急に不快な感じであつた、自分は少しも輕浮な動機から其處に行かなかつたから。自分の心靈は全く空虛で、思想を統めることが出來なかつたから。自分の精神は旋轉し思想は錯雜の極に達した。自分は二つの憔悴れた顏に目を注けた、——一年老つた半死の二婦人は一心に神聖な偶像を凝視めて唇を動かして居るが、自分には彼等が何を云つて居るか、一語も聽き取ることが出來なかつた。

法會が了つた時、自分は僧院の周圍を步いた。晴渡つた日和であつた、雪がきらめいて日光に反射し、山雀が樹上に囀り、枝から霜を振ひ下した。自分は寺庭の石壁に行つて遠景を眺めた。修道院が丘上に聳え、その前面には遙に廣い快活な土地が擴つて居て、優に雪で覆はれ、青味がゝつた銀色のマントルを着てゐた。周圍の小さな村は陰鬱な光景であつた。森が河流によりて分たれ、道路は迂曲したリボンのやうに曲つて居た。そしてこれ等全體の上に寒い太陽の光線が斜に射して居た、その周圍は沈默と美と平和とよつて包まれてあつた。

その後直に自分は尼僧の長ラエヴロニイアの洞窟に行つた。自分は睫毛の爲で無邪氣な眼の小さな老婦人を見た。彼女は何時も泣き通して、顏には無數の皺があり、絶えず親切な微笑を洩らして居た。彼女は歌でも歌ふやうに優しい調子で話し、殆ど私語のやうであつた。

『お若い者の、お前さんは救世主祭の前に林檎を食べますか。』と彼女は云つた。『然

し私共の神がそれ等を賞らし、その核が黒くなるまで待ちなさい。』

『彼女はどう云ふことを云ふ積りであらう？』と自分は考へた。

『お前の父と母とを尊敬せよ』と彼女は云はんとして居るのだ。

『然し』自分は答へた『私は父も母も持ちません。』

『では彼等の靈魂の安靜を祈りなさい。』

『然し多分彼等はまだ生きてゐる？』

彼女は兩眼より流れ出づる涙を拭ひ、愛憐の微笑を以て、自分は見詰めた。

その時彼女は頭を振つて歌のやうな音調で云つた。

『私等の神は非常に正しい、彼は凡てのものに公平に、凡てのものに優かなる恩惠を施し玉ふ。』

『それは丁度私の疑つてゐる所のものです。』

自分は彼女がひどく驚き、彼女の腕が弛んだのに氣がついた。彼女は一語も言はな

かつたが、兩眼は涙でぎらぎらと光つて居た。その時彼女は漸つと思想を統めて、また柔しい音聲で語り始めた。

『祈禱は翼を持つて居ることを忘れてはならぬ、それは如何なる鳥より早く飛び、何時も神の寶座に達する、誰もまだ馬上で天に昇つたものはない。』

彼女が云つた所のものから推して、彼女は神は親切で、善良なる性質で、全能の力があつて、如何なる掟によつても束縛されないものと考へて居ることが分かる、凡て彼女の思想は微笑の中に發表されてあつた。それを自分は理解することが出來ないので苦んだ。

自分は彼女に低頭して去つた。

『人の子は各自の必要に從つて神を解釋して居る。或るものは彼を親切な善い性質のものとして、他のものは彼を殘忍な惡い性質のものと主張する、僧侶等は神をその日稼ぎの勞働者となし、神が彼等各自に與ふる美食の爲に神に香華を供へ祈禱するので

ある、ヒヲリオンは神の中にその限りなき偉大を發見した唯一の人であつた。』と自分は考へた。

二人の尼僧が橇で雪を運び去る時、自分の側をくすくすと笑ひながら行き過ぎた、然し自分は頭が重くて、どうしてよいか自分に分らなかつた。自分は尼寺を出て行つた、外部は極めて沈靜であつた、雪がきらきらと輝いてゐた、霜に罩められた樹木が動かないで起つてゐた。凡ての天と地とは沈思瞑想を恣にしてゐるやうに見え、この沈默の沈默せる尼寺の上を親切な眼を以て眺めて居るやうであつた。然し自分はこの沈默が、いつ何時聲高い叫喊を發するか知れぬと恐れてゐた。

鐘が夕の禮拜のために鳴つてゐた、その調子は如何にもうつくしかつた、それが非常に心地よく急き立てるやうに、呼んでゐるが、それでも自分はもう尼寺に行く氣にはなれなかつた。自分は誰かゞ頭部に小さな釘でも打込んでゐるかのやうに感じた。突然自分は修道院に入らうと決心した、其處では規則が嚴格であつて、淋しい小室

に一人で瞑想したり、讀書したりする、恐らくはその寂寞の中に自分は亂れた心を治やすことが出來たかも知れぬと思つた。

それから一週間の後、自分はサバスティンの小さな淋しい修道院の僧正の前に現れ出た。自分はこの坊主が氣に入つた。彼は奇麗な小男で、頭は禿げ上り、髮は既に灰色になり、髭が濃くて薔薇色の頰をして居るが、容貌は嚴格で、親切な眼つきをして居た、彼は尋ねた。

『何故、お前さんは浮世から逃げ出して來たのだね？』

自分は妻のオルガァが死んで、全く精神が攪亂されたことを彼に說明した、然し何ものか自分の話を止めるやうであつたから、それ以上彼に話すことが出來なかつた。

彼は髭を撫でながら、自分の身の上を取調べて云つた。

『お前さんは束修を拂ふことが出來るかね。』

『自分は殆ど百留位所持して居ます。』と自分は答へた。

『あそこに行つて居なさい、その客間に。私は明日日中の勤行の後でお前にお話する。』
來客を監督するのは敎父ニッフォンの任務であつた。彼もまた自分によい印象を與へた。

『俺共の會衆は樸直で、眞に兄弟のやうに親しい、吾々一同は神に對する勤行に就て同樣に働く、此處は他の多くの家とは全く異つて居る。勿論此處には一種の敎師が居るけれども、彼等は吾々に少しも干渉せず、また吾々を放任して置く。此處でお前さんは心靈の休養と平安とを發見し、また幸福を求めることが出來る。』

夜がまだ明けない前に、自分は修道院の全部を見た。昔時、この修道院は鬱蒼たる森林の中に建てられてあつたことが分かる。後になつてその周圍にある凡ての樹木が切り倒されたもので、此處彼處に樹木の斷株が現はれて居た。どちの側からも、樹木が僧院の壁まで擴つて、二つの黒い翼のやうに青い寺院と白い僧院の建物を封じ込んで居た。その前面に小さな湖水があり全く氷で鎖されてあつた。その後方には湖水の

後にある土地、クディアロヴの三つの會堂、トロコントセヴにある聖ニコラス寺院の黄金色の屋根などが見えた。僧院から遙かならぬ湖水の此方にはクディアロヴ・ヴィセルコの小屋と五六十の農家があつた。其處等から餘程遠方まで大きな森林であつた。

凡ての景色が非常に美はしかつたので、自分の心は優しい情緒で充されてあつた、此處で自分は神と語り、心中にある秘密を吐露し、謙遜して神の聖き法則を敎へ示されるやうに神に禱つた。

その夕方自分は夜の祈禱會に列席した。勤行に相應しい尊嚴と信仰深き熱心を以て歌はれてあつた。然し歌には無頓着らしく見えた。一人もよい音聲のものが居なかつた。自分は禱つた。

『おゝ神よ、若し自分があなたに就き大膽な思想を起すやうなことがあらば、どうかお赦し下さい、それは不信心の結果でなく、あなたを最も賢く、凡てのものを知り玉ふものとして熱愛するからであります。』

突然自分の側に起つて居た僧侶は笑つて自分の方に向いた、自分は何心なくつい聲高く痛悔の語を發した。自分は彼が微笑した時彼を眺めた。彼は非常に立派な顏であつた。自分は頭を垂れて眼を閉ぢた、自分はその前後にあんな立派な男子を見たことがなかつた、自分は靜かにその男の極近くに坐つて、少し灰色がつた黒い髯のある牛乳のやうに白い顏を見詰めた。彼の眼は大きくて濕つた和いだ光輝があり、傲慢の目付きであつた。彼は身の丈けが高く、格構がよく調つて、鷲の嘴のやうな鼻を有つて居て、何處にか高尙な上品な育ちのやうな所があつた、彼は自分に餘程深い印象を與へた、そのためか自分は夜分に彼の夢まで見た。

九

敎父ニフォントはその翌日早朝自分を起した。

『僧正がお前に試補の仕事を命じた。麵麭燒房に行け、この親切な兄弟は其處で萬事お前を指揮する、そしてお前の直接の長者だ、さあこの僧服を着なさい。』

自分はその僧服を着けた、それは破れた上に汚くなつて居たが、自分の身體にすつくり合つた、長靴の一つだけが弛るかつた。

自分はその長者を見詰めた、彼は肩幅が廣く、額と頰には痣腫やら小疹やらが無數にあり、その上に灰色の毛が房のやうに生えてゐた。顏一面に羊毛のやうな毛で覆はれてゐた、大きな額にある深い皺、くらびるの周圍の緊張、小さな險惡な眼がなかつたものなら、彼の相貌は隨分滑稽至極なものであつたに相違ない。

『よく見なさい。』と彼は云つた。

彼の聲は、宛然破れ鐘のやうに鳴り響いた。

『それがミクハさんだ、では左樣なら。』とニフォントが笑つて云つた。

吾々は庭に行つた、もう暗くなつてミクハは何やらかやらに躓いて恐ろしく罵り始めた。彼は自分に云つた。

『お前は生麺を捏ねることが出來るかい。』
『自分は生麺を捏ねて居る婦人を見たことがある。』と自分は答へた。
『婦人？、お前は何時も女以外のことは何も考へて居ない、女は何處にでも居る。この世界は女の爲に咒はれてあることを忘れはしないだらうね。』
『然し聖母マリアも女であつた。』と自分が答へた。
『さうか。』
『そしてまたその外に多くの聖い女があつた。』と自分は考へた。
吾々二人は麺麭燒房に着いた、彼は燈火を點けた。其處に袋で覆はれた二個の大きな捏槽があり、その側に豆粉入の長い箱、ライ麥粉の入つた大きな袋、玉蜀黍粉の箱があつた。何處も彼處も汚れて蛛網や、灰色の塵埃だらけになつて居た。ミクハは一つの桶から包を一つ取り出して地上に投げつけて云つた。
『此處に來て仕事にとりかゝれ、生麺がある、泡が立つてゐるだらう、あれはもう出來て脹くれたのだ。』

彼は三歳兒位の大きさの豆粉の包を桶の端に傾け、ナイフでそれを擴げて叫んだ。
『水を手桶に四杯丈け入れて捏ね！』
彼は既に白霜で覆はれた樹木のやうになつた。自分は大水桶を後に投げて袖を上に向けた。
彼は叫んだ。
『それには及ばぬ、股引を除いで、足で捏ねたらいゝ。』
『入浴してから大分間がありますが。』と自分が云つた。
『誰がお前にそんな事を尋ねた？』
『どうして自分はこんな汚ない足で生麺を捏ねることが出來ませう？』
『俺がお前の弟子か、お前が俺の弟子か。』彼は自分に咆えつくやうに怒鳴つた。
彼は大きな口で強い廣い齒を持つて居た。彼が怒つた時は何時も長い手で足を擊つ

僻があつた。

『畜生、邪魔をすな！』と自分は考へた。

そこで自分は濕れた繃縷で足を拭いて担桶の中に這入つて、生麺を踏み始めた。その間に自分の先生はパン焼房を彼處此處と走り廻つて叫んでゐた。

『俺はお前に少し歌を敎へてやる！。海料理人の息子、お前に謙遜と服從を敎へてやらう！』

自分は最初の一桶の全部を捏ねて、第二の分に着手した、その中にある生麺が脹れ上つた時自分はそれを捏ねた。それから玉蜀黍粉の番になつた、これは手で捏ねなくてはならぬ、自分は却々の剛情ものであつたが、かう云ふ荒仕事には慣れなかつた。自分の鼻も耳も眼も粉だらけで、見ることも聽くことも出來なかつた。冷汗が自分の額から生麺の中に落ちて居た。

『汗を拭ふやうな繃縷はありますまいか。』と自分は云つた。

ミクハは火のやうになつて怒つた。

『俺はお前に何か天鵞絨のやうなものでも買つてやらう、この僧院は二百三十幾年前に建てられたものだ、折角お前が來てそんなものを整頓してるのを待ち設けて居た。』

自分は笑はざるを得ないやうになつた。

『自分の爲に生麺を捏ねては居ない、他の人がこの麺麭を食ふのてせう。』と自分は言つた。

彼は蝙蝠のやうに、毛髪を逆立て全身を震はして、自分の所に歩み寄つて來た。

『若しお前がそんなに潔癖なことを云ふなら、袋でても拭き取ればいゝさ、俺はお前が大變な破廉恥漢だと云ふことを僧正に話さう。』

自分は此奴にひどく驚かされたので、怒ることも出來なかつた。彼は殆ど絶間なく働いた。重い包——二百ポンドの重さの包——も彼の手には輕い座蒲團と同じだ。彼は粉の中に息をつまらして唸り、罵り呪つて、自分を黒奴のやうに逐ひ廻はした。

『急げ、急げ、急げ！』

それで自分は眩暈がする程に急いだ。

そこで最初の間、自分は服從を厭なものと知つた。麵麭焼房は食堂の下の土中室にある。その天井は極く低い圓天井になつて居た。そのたつた一つの窓は堅く鎖され、室内は窒息でもしさうてあつた。粉は濃霧のやうにその周圍に立ち塵つて居た。その中をミクハは鎖に縛がれた熊のやうに、飛び廻つて居た。加之、陰氣な焔が竈の中にちら〳〵と動いて居た。それは夢魔であつて仕事ではなかつた。此處は大概吾々二人であつた。吾々の手傳に誰かゞ來ると云ふことは極めて稀であつて、只懲罰の意味で以て此處で働くべく送られるものがあるのみであつた。忙しいので禮拜式に列する時間もなかつた。毎日ミクハは自分に教訓を與へた。彼は太い繩で自分を縛つて居るやうに思はれた。彼はこの人間の世界に反抗し、激烈な憤怒の焔を燃やしてゐた。同時に自分は彼の說教に苦んだ。そして自分の良心は恰度煤烟で覆はれてるやうに見えた。

『お前は今普通の人間とは何にも關係がない。』と彼は云つた。『人間はこの世で罪惡の外に何事もしでかさぬ。お前は既に浮世を捨てたんだ、お前の身體は浮世から離れたんだから、精神も浮世から離れ全く其のことを忘れんければならん、若しお前が人間のことに就て考へるなら、お前の思想は屹度女のことに向つて來る。浮世は女によつて罪惡の深淵に沈み、永久に拘束されてゐる！』

自分は此の當るべからざる氣焔に反抗してみようと思つたが、何か言はうとする前に彼は叫んだ。

『默つて居ろ！經驗に富むものが云ふことを注意して聞け、お前の長者を尊敬しろ、俺はお前が聖母マリアのことに就て言はうと思つてゐることを知つてゐる。然し基督は天から純潔に神聖に下る代りに女から生れたから、彼が十字架上に死んだのは正しいんだ、加之、基督は一生を通じて此等のいやしむべき婦人に餘り親切にし過ぎたことが分かる。若し基督がサマリヤの女と語る代りに、彼女をヤコブの井戸に投げ込み

姦淫の女に向つて眞先きになつて石を抛り投げたなら、浮世は救はれたかも知れなかつた。』

『然しそれは教會が主張する意見ではないんです。』

『默つて居ろ、俺は今云つたことを今一度繰返へして聞かす、教義とは何か、お前は如何して知ることが出來るか、教會は全く浮世の俗僧の掌中にあるのだ、華奢な女のやうに、絹布の着物を着て歩き廻はる放蕩者、ハイカラの爲に束縛されてゐる。彼等は凡て異論邪説の徒輩であつて、四組舞踏を演ずるには適して居るが、教會の爲に掟を設けるには極めて不適當だ。清淨無垢な心を以て神のことを考へると云ふことが、結婚した男子に出來ると思ふか、いゝえ、それは決して出來ん、彼等が原罪——エデンの花園から逐はれたその恐るべき罪惡——を繼けるからだ。この罪に依つて吾々は皆罰せられて永久の苦痛を受けて泣いたり齒を喰ひ縛つたりしてゐる。吾々はこれに依つて未來永劫神の顏を見ることが出來ないやうに盲目になつた。子供を産んで、自分

で罪惡の網を造り、自分達と同じく、他の人々を地獄の路に縛りつける僧侶は、彼等自身の罪過を辯護する爲に恣に種々な掟を定めるのだ。』

何だかミクハが自分の周圍に石壁を積み立て、それが漸次に自分を圍み、圓天井が頭に密着くやうになるまで下つた。と、自分は彼の説教から窒息し壓迫されたやうに感じた。

『何故それならば神は生めよ殖えよと云はれたか。』

その時、自分の長者は顏色を眞青にして、坐板を踏んで野獸のやうに唸つた。

『さうだ、神はさう云つた、確にさう言つた、然し神が云つた意味がお前に分るか、鹿馬野郎、神はかう云つた——生めよ殖えよ、地に充てよ、我は爾を惡魔の力に委めん、爾は以後永久に呪はれよ——それは實際に神が云つた、自ら神の奴隷と稱する此等の呪はれた放蕩者は神の掟の中にこの語を牽強けた、今お前は彼等の虚言と惡計を理解したか。』

彼は實際山嶽が上から頽れ落ちて自分を窒息さしたかのやうに怒鳴つた。それと同時に自分の周圍は眞暗になつた、自分の信仰は過去のものであつた、然し自分は彼の迷信を辯駁することが出來なかつた、全く自分の精神が彼の猛烈な癇癪玉によつて攪き亂されてあつたから。若し自分が聖書から一句を引照すれば、彼は直に他の三句位を持ち出して答へ、却つて自分の方から武器を奪ひ取つた、聖書は種々な色の花に充てゐる草原のやうだ、赤い花が欲しければ赤い花もある。白い花もある。滔々たる彼の議論に壓服されて自分は默つて了つた。然し彼は勝利者でその兩眼は狼の眼のやうに輝いてゐた。この間吾々は間斷なしに活潑に働いて居た。自分が捏ね廻はしたものを、ミクハが塊に作つて籠の中に入れ、適度に燒けた時に取出してゐた。自分はまたそれを棚の上に列べ、同時に自分の手を燒いた。自分は生麪が粘り着き粉を被り、目も見えなければ耳も聞えず、非常に疲勞して、もう彼の話を聞き分けることが出來なかつた。

同僚が時々自分どもの所を訪ねて來た。彼等は何時もなにかにつけ色々な諷刺を云つて笑つた。然しミクハは怒つて麵麭燒房から彼等を追拂つた。自分は燒傷でもしたやうな感じがした。ミクハと生活することは自分には苦痛であつたから、意地が惡くなつた。自分は彼を好かなかつた上に彼が畏かつたのだ。

屢々彼は自分に云つた。

『お前は夢に裸體の女を見たかい。』

『いゝえ、決して見ません。』と自分が云つた。

『虚言を云ふな、何故お前は虚言を云ふ?』

彼は怒つて自分の方に向いて齒を露出し、

『貴樣は卑劣な惡漢だ!!』

自分は全く驚かされた、何うして彼は女のことを話すのか、朝の三時から晩の十時までも働いて骨が痛んで橫になる時に、若し眠ることが出來ればそれよりありがたい

ことはない。それにミクハは女のことを話すのはどうだらう！

或時自分が麵麭種を取りに貯藏室に行つた、それは同じ土中室の中にあつて麵麭焼房とは對向になつてゐる室で全く暗かつた。自分は室の戸が充分締つて居ないのに氣がついた、其處に燈火がついて居た、自分は戸を開けて見ると、ミクハは床上に悶えて慟哭して居た。

『私を救はせ給へ、神さま、私を女より救ひ玉へ、……私を救はせ玉へ！』

自分は此場の眞の意義について何等の注意もしないで、直に立去つた。

ミクハは何時も女に就て怨めしく語り、女に關することは何でも、それにあて倣る百姓語を用ゐて侮辱し、同時に唾を吐き、彼の指を以て足をひつかいた、宛然彼が世界中の女をひつかき千々に引き裂かんとするかのやうに。自分はそれを聞いた時、厭氣がさして胸が惡くなつた。自分は妻のこと、結婚の晩に我々がお互に流した幸福の涙、二人が經驗した烈しい快樂に就て考へた。

『それは神が人間に與へた最も慈悲深き恩恵の一つではあるまいか。』と自ら考へた。

自分はタティアナの親切な心、無邪氣、率直を回想して、女性に對するこんな誹謗を憤り涙を流した。

『僧正が自分を呼びに來た時、悉く彼に打明けて話さう。』と自分は考へた。

然し自分が此處に來た第一日に話をしなかつた僧正は却々急に自分を喚びに來なかつた。來る日來る日も過ぎ去つた、盲人が互に轉り合つて暗い狹い森林の道を行くやうに。然し僧正から召喚が自分に達しなかつた。自分は待ち遠くて悲しくなつた。

自分の頭に灰色の髪を見たのは丁度その頃で、まだたつた二十二歳であつた。

自分は例の美僧と話したいと思つたが、彼に出會ふことは稀であつた。而もそれが眞の瞬間に過ぎなかつた。彼の高慢な顔容が少しの間表はれ、それから見えざる影のやうに自分は彼を慕つてゐた。

自分はミクハに彼のことを訊いた、彼は叫んだ。

『ハヽヽ、彼奴、僧侶の不面目漢、ハヽヽヽ、賭博をした爲め、聯隊から放逐され、女に關する多くの醜聞の爲め、宗教學校から放逐された。成程彼が學者と云ふことは俺も認めてゐる、それて、宗教學校の職員の地位を得てゐた。ッユドヴでは盛に賭博をやつたり、詐欺を働いたりした。それから彼は此處に來て七千五百留の金を出して入院券を買ひ求め、少し許りの土地を僧院に寄附して大に尊敬を受けた。此處に來てからも紙牌遊が好きで盛にやつてゐる——僧正、食事係、會計係と何時も盛に賭博をやつてゐる、オヽ惡漢ー、彼奴は氣儘勝手な生活をする自分專用の室を持つて居る、全く言語同斷のことだー』

自分はその話を信じなかつた、また信ずることが出來なかつた。

十

一日、自分は敎父イシドアー食料係——に向つて、僧正に對面さして呉れるやうに求めた。

『對面させ、どう云ふことに就て？』

『信仰問題について！』

『それはまた何う云ふことか。』

『自分は僧正に尋ねなければならぬ種々な問題を有つてゐるのです。』

彼は自分を頭から足の爪先きまで見詰めた、この男は自分より丈けは高かつたが、痩せこけて骨ばつてゐた、敏捷な喰けるやうな眼つきで、鼻は長く曲つて、鬚は針のやうに尖つてゐた。

『正直に白狀しろ、お前を苦しめるのは肉慾ぢやないのか。』

彼等は永久にこの特殊の問題について話してゐた。自分はそれに答へなかつた、然し簡單に自分の疑問を話した、彼は眉を顰め、微笑して答へた。

『祈禱はそれに對する唯一の解毒劑で、祈禱によつてお前は靈魂の苦痛を癒やすこと

が出來る、然し俺はお前が仕事に對する熱心に免じ、お前の「異常な」要求を、僧正に報告してやらう、安心してゐろ！』

彼は自分の要求を「異常」と云つた、その語が異樣な氣持を與へた。それには自分の將來にとつて利益にならぬ生意氣な傲慢だと云ふ意味があるやうな氣がした。遂に自分は首席僧正の面前に呼び出された。彼は自分が低頭した時、自分の容姿を熟視め、それから權威ある調子で自分に話した。

『敎父イシドアが來て、信仰問題について予と議論をしたいと云ふお前の希望を話した。』

『自分は議論するために此處に參りません』

『長者が話す時に横合から邪魔をしてはならん、苟も二人が一つの問題について話す時は議論と云ふものだ、吾々社會の日常生活に關係することでなければ、それは思想の誘惑と云ふものだ。吾々は勞働組織して、肉體と一時その中に宿る靈魂を維

持する爲に働いてゐる、それで靈魂は罪深き世界に恩惠を祈願することによりて、神に至る力を發見し得るのだ、それは巧妙な詭辯では得られるものでなく、只激しい勞働によりてのみ得らるべきものだ、吾々の求むる所のものは智識ではなく、心の諄撲である。予はミクハとお前の間に交はされた議論を知つて居るが、予はどうもお前に讃辭を呈することが出來ぬ、お前は誘惑に屈服しないため、お前の大膽な思想を調和しなければならぬ、檢束されない思想、——信仰によりて檢束されない思想——は惡魔の武庫にある銳利な武器であることを證明して居る。理論は肉から、自由思想は惡魔から來る、然し靈魂の力は神の精靈の一部分だ、默示は正しい瞑想によりて與へらるゝ、天よりの恩惠だ、お前の敎師ミクハは苛刻な性質の僧侶だが、信仰上に於ては眞の兵卒だ、彼の勤勉は他のものから愛されて居る、お前自身の懺悔の爲め、毎夕仕事を了つた時、耶蘇十字磔の像の前に行つて救主の榮光を讃美する歌を三度繰返へせ、十日間引續きそれを行るがよい、予はまたお前が何か敎を受けたいやうなことがある

時には聽悔僧マルダリイアスの所に行くやうにすればよい。お前はある財産家の會計書記であつたと思ふ、氣をおつけ、予はお前のことを念頭から離さぬ、お前にはまた親戚と云ふものがないやうだ、もう彼方に行け、そして予はお前の爲に祈らう、未來に幸福なる時を待てー』

自分は麵麭燒房に歸つて僧正が云つた敎訓に就て考へた、然しそれが自分には餘程淺薄に見えた。

成程人間の理性は眞理の探究に迷ふかも知れぬ。然し羊と同じ方法で生活することは人間として決して價値のあることではない、その時に自分は敬虔な瞑想を自分の心靈最奥の安息所の鐵管と考へた。あらゆるものの根本がその中にあり、其處から思想は實の多い果樹のやうに上に發射するのだ。自分の心靈の中に何も惡意や不可解のものを發見しなかつた。然し神のみが不可解なもので、この世のみに惡意があるので、自分には關係がなかつた。ミクハが同僚から愛されてゐると云ふことは全くの虛僞であつた、自分は他のものとは離れて居り、仲間の會話には立ち入らなかつたが、でも自分の眼は開いてゐた、古參の僧侶も新參のものもミクハを恐れて居ながら、彼を輕んじ彼を厭つてゐた。

加之、自分はこの僧院が全然商業上の立場から建てられてあることに氣がついた。僧侶等は公然材木業を營んだり、農夫に土地を貸付たり、溜水の漁獵權に對して料金を強請したりして居た。僧院は水車、種々な市場、大きな果樹園を所有して居て、林檎、苺、揶菜を賣つた。廐屋には十八匹の馬が居る、僧侶は全體で五十人許りで、大部分は強壯で勞働に慣れて居た。只少數の老人が僧院に參拜に來る順禮者の心に感銘を與へるために置かれてあつた。僧侶は酒も飮めば女も斥けなかつた。青年の僧侶は附近の百姓が所有して居る小屋で泊つたものだ。女が部屋を掃除すると云ふことを口實にして、年老つた僧侶の部屋を訪ねて來た。また屢々女順禮者を耻かしめるやうなこともあつた。

自分はこんな行爲を非難はせぬ、その中に罪惡を見出さないから。虚僞だけは厭であつた。

多數の候補僧があつたが、新參者に課せらるゝ悔罪上の訓練が非常に嚴しくつて、大抵のものはそれに堪へることが出來ないで逃げ出した。二ケ年間自分はその神聖な場所で生活した。その間に前後十一人以上も逃げ出した。彼等は大抵一二ケ月間居て逃げ出した。

勿論僧院には巡禮者を引きつけるやうなものが多くあつた。例へば亡くなつた同僚ヨサファの鎖は膝の苦痛に効驗があり、彼の帽子を頭に置くと忽ち頭痛が癒つた。また森林の中には氷のやうに冷かな水の湧き出る泉があつて、その水は凡ての疾病に効驗が著しかつた。基督昇天の繪畫があつて、それが正直者の眼に多くの奇蹟を働いた。同僚マルタリアスは未來を豫言して苦悶してゐるものを慰める靈力を有つてゐた。萬事が巧に配置されてあつて、毎年五月には此處に順禮者が群をなして集つて來た。

僧正と會見して以來、自分は萬事がもつと單純で、もつと親密で、もつと仕事の少ない僧院に行きたいと思つた。僧侶等が各自にもつと適當なる仕事を嚴密に考へて、この世界の罪深きことを認めるやうな僧院を求めた。然し種々な出來事が起つてその實行を妨げた。

或る日、自分はグリシヤと云ふ一人の新發意と知合になつた。彼は執務所に仕事をしてゐた。自分はある間彼を注目してゐた。彼は何時も同僚の居る所を足音のせぬやうに、早く歩き、煙色の眼鏡をかけ、充らなさうな顏をしてゐた、彼は何時も頭を垂れ、自分の足許の外は何ものをも見ようとはしないかのやうに歩いた。

グリシヤは自分が僧正と會見した翌日、麵麭炕房に現はれた、ミクハは丁度精算をする爲に會計係のところに行つてゐたので、グリシヤは優しく自分に會釋して言つた。

『君は僧正に面會したかね。』

『え、面會した。』
『僧正と何か議論をやつたかね。』
『いゝえ。』
『僧正は君を逐ひ出したのか。』
『何故？』
グリシャは眼鏡をかけ直し、困つたやうな容子をして言つた。
『ご免なさい。』
『では、君は逐ひ出されたのか。』
グリシャは點頭いてさうだと答へた。
彼は豆粉の入つた箱の端に坐り前方に凭り掛り、ひからびた咳嗽をして、自分が僧正の言つたことを語る間、その箱の側を踵で輕く打つてゐた。その時彼は突然に飛び上つて、彈機の上にでもゐたかのやうに眞直に起ち、そして清亮かな憤激した聲で云

つた。
『此處は全く浮世と同じやうに金儲けを目的とされてあるのに、何故人間の靈魂を救ふ靈場と云ふんだらう！、自分は罪深い利慾の道から免れるために此處に來たんだ、此處でまた丁度此等のものと衝突した、全體何處へ行けば可いのだらう？。』
グリシャは經歷を語りながら、戰き慄てゐた。彼は麵麭屋の息子であつて、商業學校の全科を卒業し、それから父の職業に從事してゐた。
『麵麭燒以外のものであつたなら、私は不平を云はなかつたらう、が、その職業は卑められてあつたので私を苦しめた、麵麭はあらゆる人類に缺くことの出來ぬもので、何人も人間の必要品から利益をする目的でそれを聾斷してはならぬ、父の貪慾が發覺しなかつたならば、或はその職業に對する私の嫌厭の念を壓服したかも知れなかつた らうが。私には一人の姉があつた。活々した快活な少女で、女學校に通つてゐた。彼女は學生達と一緒に學び讀書を好いてゐた。或る日、父が突然に彼女に云つた。

「エリザベス、お前はもう學問を止してお嫁に行け、私はもう新郎を探したよ。」
て彼女はひどく驚いて顛倒つて、叫んだ。
「私は結婚はしませぬ。」
然し、父は娘の髪を捕へて無理に從はした。
父が娘のために撰んだ男と云ふのは金持の茶商の息子であつた、父は何時もその男が金持であるのを誇つてゐた、父と姉とは小さな二十日鼠と犬とのやうに不和であつて、二人の心は南極と北極のやうに隔つてゐた。
「お前は馬鹿な奴だ、この上の望みがあるものか、彼はヴオルカの町々に倉庫を持つて居る。」と父が言つた。
遂に結婚が行はれたが、來客が饗應されてあつた間に、彼女は寢室に行つて短銃を執り、心臟を打つて自殺を遂げた、私は彼女がまだ生きて居るのを見た、彼女は自分に云つた。

「御免なさいよ、グリシヤ、私は生きて居たいのは山々だが、それが出來ない、……それは餘りに恐ろしい、私は生きてることが出來ない、出來ない、どうしても出來ないんだから。」
グリシヤはこんなやうなことを丁度彼が過去から免れんとしてゐも居るやうに急き込んだ調子で話した。自分はその間竈を見詰め、耳を傾けてゐた。竈は年老つた目のない顏のやうに、自分をじろじろと見詰めた、猫の舌で貪慾に舐めた黒い顎で、木の丸太を燃やす時、爆聲を發しながら。自分は火の中にグリシヤの姉を見て考へた。
『何故、人間はこんなにお互に迫害し合つて零落するだらう!』
グリシヤの語は晩秋の紅葉のやうに、疾くしげく落ちた。
『私の父は殆ど氣が狂ひ、ぢだんだを踏んで叫んだ。
「彼女は父を辱かしめ、自身の心靈を壞はして了つた」と、父の精神は葬式が濟むまで醫に返へらなかつた。その時カザンの土地の人々が墓に憐れなリザを伴つて花輪を

以て、彼女の棺を隠したのを見て、「皆のものが、娘の味方をするから、俺が娘を悪く取扱つたことは明かだ」と父は云つた。』

グリシヤが自分にこの陰鬱な物語をした時、彼の眼には涙があつた。自分は彼が眼鏡をふく時その両手が慄へて居るのに氣がついた。

『私はこの不幸の以前でさへ、僧院に入らうと思つたんだ。』と彼は語り續けた。

『どうか僧院に行かして下さい」と私は父に懇願した、が、罵詈した上に私を打擲した、然し私の決心は容易に消え去らなかつた、「商人になりたくない、何うか行かして下さい。」と、リザの死は父の頑固な心にも泌々と觸れてゐたので、遂に私の願を容れて呉れた、私は此處に來てから四年になる、此處に來る前、私は他の二つの僧院に行つて試た。然し何處でも商賣をやつてゐるのを見て、精神の平靜を得なかつた、彼等は土地、神の語、お追從、奇蹟を商賣にしてゐる、私は凡てこれを見ると厭氣がさして來る。』

彼の物語は深く自分を動かした、その時まで自分は課せらるゝ重き仕事の爲に疲れ果てゝ何物に就ても深く考へなかつたが、今自分の頭腦の中に眠つてゐた我儘な思想が閃いた。自分はグリシヤに云つた。

『何處に神がゐるか、此處に吾々人間は出來心と痴鈍とに取り捲かれて居る、大きな不幸を引き起す小さな詐欺の外に何もない、何處に、何處に神がゐるか。』

其の時ミクハが歸つて來たので二人は別れた。

其の日からグリシヤは屢々自分を訪ねて來た。

彼に自分の思想を打明けた、彼は自分の思想に驚き、謙遜するやうに忠告した。

『では、何故そんなに多くの苦痛を受けなければなるまいか。』と自分は尋ねた。

『各自の罪惡のために。』と彼は答へた。

彼の思想によれば、何も彼も神から來る、——饑餓も、火災も、橫死も、大洪水も、その他あらゆるものが神から來る。

『若し果してさうとすれば、地上に不幸の種子を蒔くものは神だ。』と自分は云つた。
『ヨブのことを考へなさい、自惚漢！』彼は自分の耳に囁いた。
『ヨブの例は何ものをも證明して居らぬ。』と自分は云つた。
『若し自分がヨブの地位にあつたなら、屹度神にこんなことを云つたであらう。そんな恐怖を以て自分を迫害し玉ふな、全能は自分を導き玉ふ所を眞直ぐにお示し下さい。自分はあなた自身の心像にかたどり、全能によつて創られた全能の力の息子でありますから。だから、全能は自分の子供を斥けて、自らで自身を耻めることをお止し下さい。』
自分の愚かな不敬虔な話が屢々グリシヤを泣かした。
『私の最も愛する同胞！』と彼が自分に抱きついて、さゝやいた。『私はお前さんのことが眞に悲しい、ひどく驚がされた、お前さんの物語と思想とは全く惡魔の所業だ。』
『自分は惡魔を信じない、若し神が全能であれば……』

自分の語は餘程彼を苦しめた。彼は潔白な温順な性質の男であつたから、自分も深く彼を愛してゐた。
自分は僧正に依つて課せられた苦行を成し遂げた、そこで直に自分は仕事を了つて敎會堂に行つた。ニイコデムス兄弟が戸を開けて自分を入れて、其のあとを閉ぢた。門の高い響が沈默した會堂内に鳴り響いた。自分は最後の輕い反響が靜まるまで、入口に待つてゐて、それから磔刑の繪に歩み寄り其の前に跪いた。自分は疲勞して立つてゐることが出來なかつた、四肢全部が疲勞の爲に痛むので、自分はどうしても讃美歌を歌ふ氣になれなかつた。手でもつて膝を緊と握り、眠い眼で周圍を見廻はして坐り、グリシヤと自分のことに就て考へた。それは丁度眞夜中で、蒸し暑い呼吸の詰るやうな晩であつた。然し會堂の内部は薄闇くつて、冷かで氣持がよかつた。彼處此處の聖像の前に洋燈がきら〳〵と輝いてゐた。裂けた舌のやうな、その小さな藍色の焔が圓屋根に、尙高く天空に、夏の夜の星に飛ばうとするやうに見えた。

蠟燭の心が柔かにべり〳〵云ふのが聞えて、それが各自に獨特の音をさして居る。睡氣を催してゐた自分にとつて、會堂は不思議な目に見えないライフに充されてゐたやうに思はれた、それは洋燈の斷えざる微光の中に丁度それ自身で話をしてゐたやうであつた。闇い心地のよい靜粛の中に使徒の顏が震くやうに見えた。それが丁度彼等使徒は、何か解らない謎について考へてゐるやうであつた。幽靈の影が自分の顏の上に、柔かに飛ぶやうに見え、油や絲杉の心地快い美しい香と香の匂とが自分を取捲いてた。厨子の扉にある金と銅とは其の華麗を和げて居る。銀は温い親しい光を放ち、其他の凡てが溶けて廣い流となり、大きな幻夢の繪のやうになつた。濃い霞んだ雲のやうに、會堂は柔しいぶつ〳〵云ふ祈禱の聲で鼓動してゐるやうに、動搖震動してゐた、その言葉を自分は聽き取ることが出來なかつた。

自分は幽靈の舞蹈の中にひつ攫はれたう柔しい睡氣が此の世以外に自分を運んだ。朝の勤行を報ずる鐘が鳴る前に、沈默つてゐるニイコデムスが來て自分の頭に柔し

く觸れ、かう云つて起した。

『平安に行きなさい。』

『御免下さい。』と自分は云つた。『私はまた睡りました。』

自分は起ち上りニイコデムスに助けられて會堂から、ひよろ〳〵と出た、彼は殆ど聽き取れないやうな小さな聲でさゝやいた。

『神さまはあなたを容します、我が恩人。』

ニイコデムスはつまらない老人で、何時も凡ての人々から、その顏を隱さうとしてゐた。彼は誰にでも恩人と云つた、或る日自分はこの老人に云つた。

『お前さんは永久に沈默の誓をしましたか。』

『いゝえ、たゞ……私は何か云ふべきことがあれば云ひます。』と答へて深い太息をついた。

『然し何故お前さんは浮世を捨てましたか。』

『それには理由がありました。』

若し自分が之に就てもつと追求して行くと、彼は默つて了ふか、でなければ非常に困つた容子をして自分を見詰めて囁いたものだ。

『私には分りません、恩人。』

折々自分は考へた。

『多分この僧侶、また一つの返答を求めてゐたかも知れぬ。』

自分は僧院を逃げ出したいと熱望してゐた。

同時に、他の人が突然その舞臺に現はれて來た。彼は僧院の塀を飛び越えて來た球のやうに、自分の眼前に跳ね上つてゐた。彼は小さな敏活なやさしい男で、圓い梟のやうな眼、曲つた鼻、薄い頭髪、何時も笑つてゐる口の周圍に、下向きになつた髭、その下から眞白な齒が輝いてゐた。

彼は冗談や婦人に關するいなせな物語をして凡ての仲間を喜ばし、夜分に僧院に婦

人を紹介し、自分の好きな燒酎を此處に密輸入してゐた、全く不思議千萬な男であつた。

吾々は屢々出會つた、自分は彼に尋ねた。

『實際どうしてお前さんはこの僧院にやつて來たか。』

『俺かね、一杯のスープさ。』

『食はうと思へば働かなければなるまい。』

『神さまは百姓のみのために其の法律を宣言した。然し俺は町人だ、其の上二ヶ年間も大藏省に勤めた、俺は自分を一種の役人と思つてゐる。』

自分は如何なる原因が人類を動かすかを發見するについて何時も好奇心を持つてゐた、特に自分の好奇心はこの男に關して銳敏であつた。ミクハは自分が大分仕事に慣れて來たのを見て、餘程懶け出して來た。彼は彼處此處と逃げ廻つてゐた。其の結果多くの仕事が自分に肯負はされた。然し一方から見ると、彼の不在は思ふまゝに朋輩

と話すことが出來るから、却つて少しは慰藉であつた。自分の朋輩は大概三人で、グリシヤと快活なセラフインと自分であつた。

グリシヤは何時も大に興奮されて、彼の手で以て、自分の言葉を遮つたものだが、セラフインは縮れ毛の頭を振りながら、口笛を吹いたり、笑つたりしてゐた。

一度自分はセラフインに云つた。

『おい、セラフイン、惡漢！お前は實際神を信じてゐるのかい。』

『私は今後三十年間にそれを君に話さう、私が六十歳になつたら、多分私が無神論者かどうかを知ることが出來る。現在私は精確に何も知らぬ、只詐僞を働くことに反對するのみだ。』と彼は云つた。

セラフインは吾々に海のことに就て話し始めた、立派な言葉で、大なる奇蹟のやうに、ある時は至極やさしく話した。然し或る時は深い調子で、それでも何時も恐怖と愛着とを以て、天空の星のやうに喜び勇んで話した。吾々二人は喜んで彼の物語に耳を傾けた、吾々は此の嚴かな活々した愛すべき物語を聽いて悲しい氣持になつた。

『海は地上から天上の野原——地上に弓形にかゝる空間の國——を眺める青い目の樣なもので、その活ける流の中に、美しい感じ易い心靈のやうに、星とその不思議な軌道の運行を吸收したり反射したりする。若し强く海の波濤を眺めると、天も亦遙に隔つた太洋のやうに、星は黄金色の島のやうに見える。』と感銘さすやうな方法で話した。

グリシヤは蒼白めた頰をして、彼の話を聽いて居た、其の間平和な微笑がその顏容にたゞよひ月光のやうに飛び走つてゐた。

『かう云ふやうな不思議と美との前で、吾々は商賣するよりよいことはない、より愉快なことはない、おゝ神さま！』と彼は悲しげに呟いた。

此の後で彼はコーカサス地方のことを話し始めた。その隱氣な嚴かな美はしい土地——地獄と極樂と出會ふ仙境に就て述べた。そこに地獄と極樂とは等しくその嚴肅に於て誇り、そこに、調和と兄弟らしい愛情がある。

『コーカサスを見ることは、地球の眞實の表面を見ることになる、其處には子供の心の清新と純潔と、惡魔の知惠の高慢な輕蔑とが、單純な微笑の中に結合されてゐる、コーカサスの地は人間の力の試金石だ、其處に弱い心は壓へつけられて、土地の力の前に恐怖を以て戰き慄へる、然しこれと反對に强い人間は力を增したやうに感じ、高慢になり得意になる――寂しい天空の眞中にある電光にまで、塔の如く山頂の聳えた山のやうに。』とセラフインが熱心な調子で云つた。

グリシヤは太息をして靜かな調子で云つた。

『誰が心靈に、その行くべき道を敎へるか、土地に向はなければならぬか、其から避けなければならぬが、何を受け何を斥くべきか。』

セラフインは困つたやうな顏容であつたが、愉快な微笑を洩らしてゐた。

『若し面白ければ天空を覗け、君が覗て見ても其の華美を增すこともなければ減ることもない、それについては安心してゐればよい。』

自分はセラフインを理解した、でも彼の言ふことを理解し損つた、一度自分は怒つて彼に云つた。

『さてそれでは人間に就て、君の意見はどうかね。』

セラフインは肩を聳かして笑つた。

『人間？何に、人間は種々な草のやうなもの――皆全く違つて居る、盲人には太陽は黑い、自分自身と戰ふものは神と不和だ、加之、人間まだ若か過ぎて、成人として取扱ふことが出來ぬ、君は三つ子をシスターと云ふことが出來ると思ふかね。』

こんなやうに冗談が彼の唇から、のべつに出た、サベルコと同じやうに、彼の口から冗談が林檎の花のやうに飛んだ。如何なる眞面目な種類の問題を持ち掛けても彼は茶化して了つた、その狡猾い遣口は自分を怒らした、自分は怒つてゐるのに彼は直に眠つて了つた。屢々自分は怒つて云つた。

『この怠慢者奴、のらくらして遊んでくらし、肥つてゐるのを口實にするなんて。』

こんな場合に彼の答は何時もこんなものだ。

『自分自身で稼いでパンを食べるものは飢える、百姓を見玉へ、論より證據だ、彼等は一生穀物を蒔いて刈り收るが、それを食べることを許されてない、君の云ふことは尤もだ、然し勞働は俺の商賣でない、勞働は只人を疲らし弱らすのみで、決して人を富ませ、能く養ふものでない、寢室に長く寢てる人は太るさ。』

自分は彼と議論をした、然し吾々の議論が了つた時、笑はない譯に行かなかつた。彼は實に素朴で正直であつた、それが自分を惹きつけた。彼には虚僞とか詐欺とか云ふものがない、で、單にかう云つて居る。

『俺は只一つの小さな昆蟲のやうだ、大した害毒もないさ。』

此男の性質は餘程サベルコに似て居た。自分は苦辛い人生に清らかな精神を有ち、愉快な氣持を有つ人々のあるのに驚かされた。

セラフインとグリシヤを比較して見ると、輝く春の日と、秋の夕暮程違つてゐた。

それでも彼等二人はどちらも、自分とよりか、お互同志の仲がよかつた。これが少なからず自分を苦しめた。直に彼等二人は僧院を去ることになつた、グリシヤはオロネツツに行く考へで、セラフインは自分に云つた。

『俺は彼と一所にオロネツツに行き、其處で一週間遊んで、コーカサスに歸る、君は吾々について來た方がよくはないかね。旅行によつて君は求めてゐるものを、もつと早く發見することが出來よう、でないと君は今持てゐる餘分なもの——恐らくは正しく且つ善なるもの——までも失つて了うよ。』

自分は丁度その時マータリアスの宗教的敎練を受けてゐたから、彼等に從いて行くことが出來なかつた、マータリアスは大に自分に興味を持たしてゐた男であつた。彼等に別れる時の自分の氣持ちは悲しかつた。

隱者マアタリアスは、聖堂の裏にある會堂の石壁の附近に掘られた穴藏に住つて居た。往昔この土牢は山賊の侵掠を防ぐための寺院の寶物庫であつて、地下道が聖堂から此の密室に通じて居た。後になつて穴藏の上にあつた圓天井の石が破壞され、その上に厚い板でもつて一種の天井が造られ、小さな窓が嵌められた。窓の周圍に格子が備へ付けられてあつた。其處から巡禮者は隱者を見ることが出來た。その一隅に引き窓があり、それから螺旋形の梯子段があつてマアタリアスの所へ行くやうになつて居た。この穴藏は中々深いので、その梯子段を下る時に眩暈がする、その梯子は全體で十二階もあつて、薄い光線はその最下底まで達しない前に、地下の濕ぽい陰鬱の中に消え失せて了つた。

その陰鬱な場處に、大きな石や土の塊に似た黒い物を區別するまでには、格子を通して長い間、強く見詰めて居なければならなかつた。然し實際、その一隅に隱者が動かないで坐つてゐた。

自分が彼の居る所まで下りて行つた時、何だか生温い黴臭い濕氣で浸されてあつた。その時、讀經臺、その後方に、黒い棺が暗黒の中から現はれて來た。その棺の中に小さな灰色の髮の僧侶が十字架、頭蓋、其他種々な宗教上の表象で飾られた黒い屍衣を着て坐つて居た。その一隅に丸い鐵の煖爐があり、其煙突は肥つた蟲のやうに、屋根の上に這上つてゐた、穴藏の壁は煉瓦石で、一面に綠色の黴草で覆はれてゐた。

信心深い行者が手に念珠を持ち、膝をしかとつかみ、鉋屑を積み重ねた上に、靜に幽靈のやうに坐つてゐた。隱者は頭を全く胸の邊に垂れてゐたので、その曲つた脊はポンプの柄のやうに見えた。

自分はその室に行くと直に默つて跪き、隱者が自分に話し掛けるのを待つて居たが、然し彼は長い間默つてゐた。周圍が皆死のやうな靜肅に支配されてあつた。自分はその萎びた鼻の尖頭の外、顏を見ることが出來なかつた。

『さあ……』と彼は殆ど聽き取れないやうな聲で呟いた。

自分はこの生ける死骸に對し、哀憐の念を以て壓服され、一語も發することが出來なかつた。

隱者は一分間も經つて再びその問を繰返した。

『さあ、お話しな。』

同時に自分の方に顏を向けた。

周圍は無暗であつた。自分はその眼を見ることは出來なかつたが、只白い眉毛、頤にある毛、そして髭のみを分別することが出來た。髭はその幽欝の中に形なく見えた彼の煩悶した動かない顏面に生えた剛毛らしくあつた。隱者が柔しい聲で呟くのを聞いた。

『私はお前が議論好きだと云ふことを聞いて居るが、何故かの、吾々は謙遜して神に仕へなければならん、神と爭つて何の益に立つか、單純な心で神を愛することは吾々の義務なんだ。』

『自分は神を愛してゐます。』と自分は答へた。

『よろしい、神はお前を罰する、然し若しお前が何も見ないやうにして「神よ、爾に榮光あれ、爾に榮光あれ」と云つてその他は何も云ふな。』

話すことは彼には明かに苦痛であつた、多分これはその衰弱の爲めか、もしくは言語に慣れないためかであつた。その聲は生きて居るものゝ聲とは思はれなかつた、どうやら死にかけてゐる鳥の羽擊の音に似てゐた。

自分は此の老人に疑問を提出することが出來なかつた、自分が質問をしてこの老人を悲しませ、折角平安に死を待ちつゝあるのを打壞すことを好まなかつたから。自分が動かないで、其處にじつと坐つて居ると、土地の上から來る鐘の音が微に聞えた。それで自分は天空を仰ぎ見たくなつた、然し暗黒が自分を下に沈めて動くことが出來なかつた。

『忍耐して神に禱れ！』と彼は言つた。『私もお前の爲に祈るから。』

その時彼は再び沈默して、動かないで坐つてゐた。悲哀の震動を自分の全身に感じ、そぞろに戰慄した。

暫らくして隱者は叫いた。

『お前はまだ其處に居るのか。』

『さうです。』

『私は何にも見ることが出來ん、よし、神は爾と共なれ、行つてもう議論を止せ！』

自分は音のしないやうにそつと逃げ出した。地面の上に出て、天空の清淨な空氣を呼吸した時、其の墓場から逃げ出して來たことが嬉しくつて雀躍りした。マアダリアスは三年間以上も此の穴窖に住んで居たのだ。

僧正の命令で、自分は此の隱士から教訓を受くる爲に、五度まで訪問させられた。然し其の折々自分は沈默を守つてゐた。自分は彼が話し得ざることを知つた。彼は自分の聲を聽いて、奇妙な此の世の人ならぬ調子で言つた。

『昨日來たのはお前か。』

『はい。』

その時彼は再び、とぎれとぎれに囁いた。

『神を怒らすな、お前は何を求めてゐるか、それは惡魔のする仕事だ、惡魔は人間を誘惑する、私は惡魔を知つて居る、惡魔は怒つてゐるからなんだ、惡意があるんだ、惡魔が怒つてゐると云ふのは、つまり惡意があるんだ、お前は怒つてはならん、怒れば惡魔と同しやうになるんだから。若し誰かゝお前を怒らすならば、お前はその人に云はねばならん、「基督汝を救へ！」と。それから、お前は自分の道を歩みその人には彼れ自身の道を行かさなければならぬ。そして浮世の凡ては見捨てゝ了つて、お前自身の心靈に就て深く考へなさい。それが何によりか一番大切なんだ。何人もそれを奪ひ去ることの出來ないやうに守り、誰もそれを拔き出すことの出來ないやうに潛めて置

くがよい。

この隱者の言葉は遠方の火事場から飛び來る灰のやうに自分の上に落ちた。から云ふ言葉は自分の求むるものでなかつたから、自分の心は動かされなかつた。自分は黒い、亂れた、退屈な、苦しい夢を見てゐるやうな氣持になつた。

『お前は默つて居る、それは至極よい。此處に來るものは屹度何かを話すのだが、私は彼等の言ふことを理解することが出來ぬ、いつも女の話をする、それが全體私に何の關係がある？。始終種々な問題に就て持ちかけるが、何を私が知るものか？。解りもしない妄言！然しお前は默つて居る、私は話をすることが厭やだ、が、僧正は「彼を慰めて呉れ、慰安を求めて居るから」と云つた。至極結構だが、何も話したくない、神汝と共なれ！、凡て汝と共なれ！。凡てのものが自分から取去られて了つて、只祈禱のみが殘つて居る。若し他人がお前を苦しめても、少しも頓着するな、惡魔は人間を苦めて喜ぶ、また私を苦しめた、……私自身の兄弟さへ何時も私を打擲した、……そ

れから私の妻……は砒素で私を毒害しやうとしてゐるのに驚いた。私の有て居る凡ての物を盜んで、それから人家に火を放けて私を呪つた、その上私を放火の下手人としやうとした、……私は牢獄に打ち込まれた、……色々な苦痛を受けた、法廷に喚び出され、一度牢獄に監禁された、神は彼等を罰したが、私は容してやつた。私は自分自身のために彼等を容してやつた。重なる不幸が私を壓迫して、呼吸をすることも出來なかつた。然し一度彼等を容してから、萬事がうまく行くやうになつた。それで多くの不幸は去り、惡魔も害毒を加へる餘地もないと感じて逃げて了つた。お前もまた凡てのものを容さなければならん、私は何も求めない、それはお前と全く同じだ。』

自分が四回目に訪ねた時、彼は言つた。

『私に麵麭を一片持つて來てお呉れ、一片食つてみたいと思つて居る、から衰弱し切つては、身體の工合がよくない。憫然と思つてそれを聞き入れておくれ。』

自分は曾て悲慘な目に會つた此の憐れな老人に深い同情を感じた。
自分は彼の饒舌を聞いた時考へた。
『それは全體どう云ふことか、おゝ神よ、そして何故かうでなければならぬか。』
再び彼はからびた舌でぶつぶつ呟いた。
『私は全身の骨節が痛んでならん、それで晝夜苦しめられてゐる、多分麵麭の外皮を一片呑み込んだら、少しは能くなるだらうと思ふ。骨節が痛む爲めに祈禱をまでも妨げられる程に苦しい。人間は何時でも禱つて居なければならん、時々刻々、眠つてゐる時でも禱らなければならん。でないと、直に惡魔が現はれて來る。彼はお前の名を呼び、お前が生活して居る處にくつついて、あらゆる手段でお前の心を誘惑する、……彼はストーブの上に坐つて居る、その煖爐が屢々熱して赤くなつてゐても心にとめない。それに慣れ切つて一向平氣なものだ。惡魔は私と相對して坐つて居る。年老つて白髪になつてはゐるが、其處に坐つてゐる。私は十字をきつて、最早や彼などには氣をつけ

ない。もう彼に厭々したから、「もう彼方へ行け」と私が云ふと、まるで蜘蛛のやうに壁を傳つて匍つて行く。また屢々不潔な襤褸のやうに空中を飛び廻る。私の受持ちの惡魔は種々に變裝して居る。私のやうな老人にくつついて居るのは疲れるばかりだが外に彼がすることは何もないんだ。彼は私に分遣されてあつた、私についてゐることは彼の義務だ、こんな老人とゐるのは彼にとつても面白くない、私は今となつては彼に對して少しも嫌惡を感じない、たゞ命令のために働いてゐる、私はもう慣れて了つた。で、屢々彼に云ふ、「おい、私はお前に疲れた」そしてもう彼に注意しない。彼は鐵面皮でないから、口を噤んで語らぬ。只何時も彼は私の名を呼んで氣をひいて見る。』
隱者はその頭を高く揚げ、朗らかな高い聲で云つた。
『私の名はミツクハイロー・ペトロヴ・ヴィアクヒイレブだ。』
その時彼は再びその棺の中に這入り、そして呟いた。
『彼は再び私を打つた！、オ、惡魔！お前は其處に居るかね、若い衆、行け、神の惠

お前の上にあるやうに！』

その日自分は憤つて泣いた、この老人は何の役に立つたか、こんな滅罪的苦行の中に、何處に美しい高尚な所があるか、自分は少しもそれを了解することが出來なかつた。自分はその日、またその後長く、彼のことを考へずにゐる譯に行かなかつた、惡魔が哄り笑つて、耳を拳固で打つてゐるやうに想像した。

最後に訪ねた時、自分は新しい麵麭をポケットに詰め込んで行つた。自分は人類に對する憤怒を持ち、荒々しかつた。自分が麵麭を與へた時、彼は呟いた。

『ほゝ、これは溫かい、ほゝ……』

老人は棺の中を前後に搖いた、そして麵麭を隱さうとした時、その破片が下の方にばら〳〵と音がした。彼は呻き續けてゐた。

『おー、おー、おー。』

暗黑、壁の徽——穴藏の周圍にある凡てのものが搖いて、この隱者の元氣のない呻吟を反覆した。

『おー、おー、おー。』

彼は一週間に四回丈け食事をしてゐたから、飢渴に迫つてゐるのは自然であつた。自分が最後に訪問した時には、少しも話さなかつたが、只唇をぱつぱつと鳴らして麵麭を呑み込んでゐた、此老人には一本の齒もないことを確めた。

自分は少時經つてから云つた。

『さて敎父マアダリアス、基督のため私をお許し下さい、私はもう他に行きたいと思つてゐます、もう歸りません、私はあなたの厚意を感謝します。』

『あゝ、さうか、私もまたお前に謝する、僧侶等にこの麵麭のことに就ては何も話さないで居てお呉れ、でないと、彼等はこれを奪つて行くに違ひない、非常に嫉妬心が深いから。彼等にもそれ〳〵當てがはれた惡魔がゐる。あゝ此等の惡魔！、彼等は何でも知らないことはない、何にも云はないやうにの……』